佐久市埋蔵文化財調査報告書第34集

NISI IPPON YANAGI

# 西一本柳遺跡 I

佐久市大字岩村田一本柳遺跡群西一本柳遺跡 I 調査報告書

1994. 3

長野県教育委員会
長野県土地開発公社
佐久市教育委員会

西一本柳遺跡ＩＨ３号住居址出土の人面付土器（1.5倍）　　小川　忠博氏　撮影

西一本柳遺跡ＩＨ３号住居址出土の人面付土器　　小川　忠博氏　撮影

# 例　　言

1　本書は、平成３年度および平成４年度に発掘調査を実施した長野県大字岩村田一本柳遺跡群西一本柳遺跡Ⅰの発掘調査報告書である。整理作業・報告書刊行は、平成５年度に行った。

2　本調査は平成３年度の岩村田高等学校第２グランド造成工事、平成４年度の岩村田高校第２グランド器具庫等の建設に関わり、長野県土地開発公社から委託を受け、佐久市教育委員会が実施した。

3　遺跡の所在地

佐久市大字岩村田字西一本柳2301他

4　調査期間および面積

岩村田高校第２グランド

平成３年７月24日～９月４日

試掘調査――面積－2,100㎡

発掘調査――面積－150㎡

岩村田高校第２グランド器具庫

平成４年６月５日～６月12日

発掘調査――面積－約86㎡

整理調査

平成３年12月２日～平成４年３月27日

平成６年２月１日～３月25日

5　挿図の方位は、真北を指す。

6　本書掲載図の作成は、荒井ふみ、小林立枝、小林よしみ、成沢富子、花里香代子、堀籠みさと、柳沢豊志子が担当し、執筆・編集は林幸彦が行った。

7　本書および関係資料等は、佐久市教育委員会で保管している。

# 凡　　例

1　各遺構の略号は次の通りである。

住居址――H　土坑――D　掘立柱建物址――F　溝状遺構――M

2　遺構の名称は、平成３年度・４年度調査とも通し番号を付した。なお、試掘調査で平面プランの確認に終わった遺構も通し番号としたが、あくまでも仮称である。

3　住居址の縮尺は1/80、掘立柱建物址・溝状遺構は1/100、土坑は1/60である。

4　遺物の実測図・拓影図は1/4 を基本とした。他はスケール上に記した。

5　土器実測図において使用したスクリントーンは、点が密なものは内面黒色処理の土器を、点が疎なものは赤色塗彩を示している。石器実測図の点は使用痕の範囲を示す。

# 目　　次


巻頭図版

例　言

凡　例

目　次

Ⅰ　調査の概要

1　調査の経緯と経過……1

2　調査の体制……2

3　遺跡の位置と周辺遺跡……2

Ⅱ　遺構と遺物

1　Ｈ１号住居址……4

2　Ｈ２号住居址……7

3　Ｈ３号住居址……10

4　Ｈ４号住居址……13

5　Ｈ５号住居址……14

6　Ｄ１号土坑……14

7　Ｆ１号掘立柱建物址……15

8　Ｆ２号掘立柱建物址……16

9　Ｆ３号掘立柱建物址……17

10　Ｍ１号溝状遺構……17

11　西一本柳遺跡Ｉ試掘調査出土遺物…18

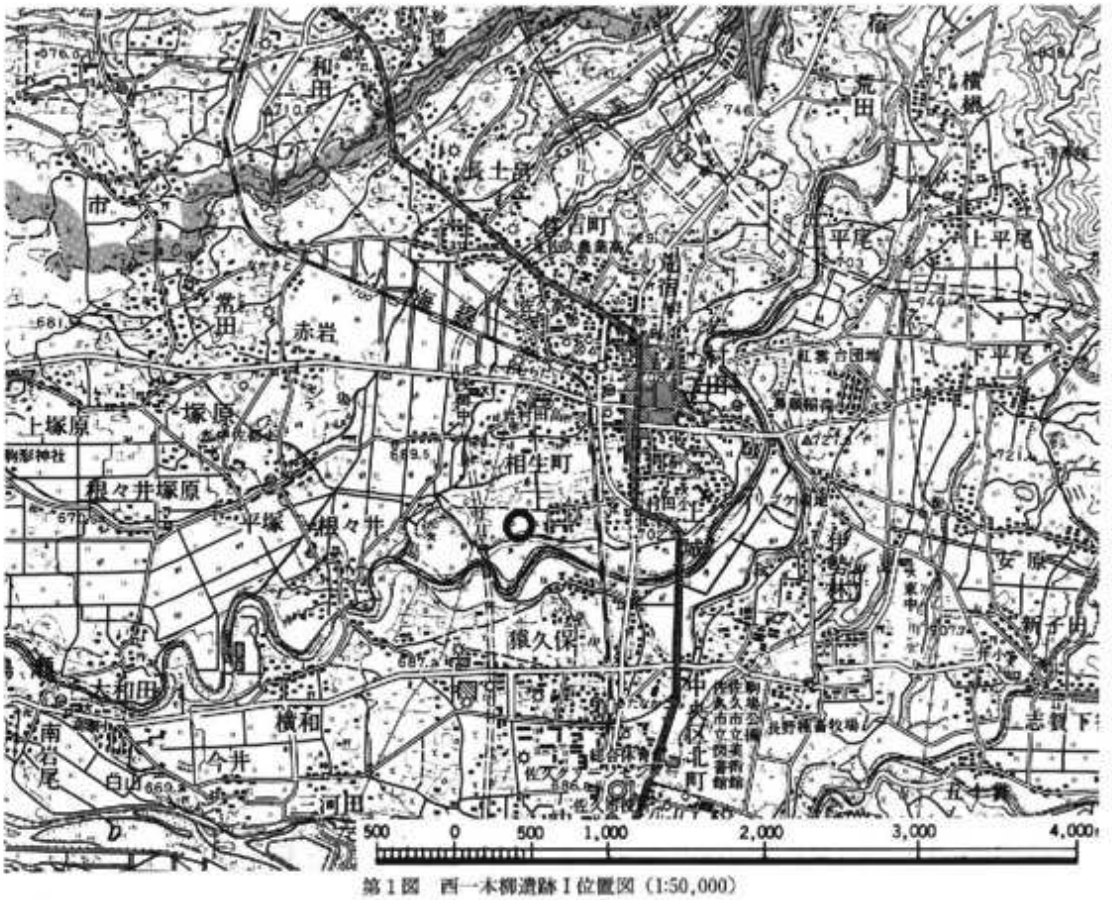
図版

# Ⅰ　調査の概要

## 1　調査の経緯と経過

西一本柳遺跡は、一本柳遺跡群のほぼ中央から西半部をいう。東半部を東一本柳遺跡中央北部を北一本柳遺跡と呼称している。佐久市岩村田市街地南部の上の城から西へ約１kmに渡って細長い台地がある。湯川の右岸に位置し、標高685～702mを測る。この台地上では昭和42年度の東一本柳遺跡をはじめとして多くの遺跡が緊急発掘調査されており、弥生時代中期から平安時代の集落が検出されている。遺跡群は、東部の上の城遺跡群、小海線用地から常木用水までを一本柳遺跡群、常木用水から西部を北西ノ久保遺跡というように便宜的に個々の名称が冠されている。

今回、岩村田高校のグランドが手狭になったため、第２グランドが造成されることになった。協議の結果１mの盛り土で造成される部分については、試掘調査を行いその概要を把握し、バックネットおよび器具庫・部室で破壊される部分については、緊急発掘調査を実施することとなった。調査は工事を担当する長野県土地開発公社から委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。




第１図　西一本柳遺跡Ⅰ位置図（1:50,000）

## 2　調査体制

◎調査受託者　教育長　大井季夫

◎事務局（平成５年度）

教　育　次　長　奥原秀雄

埋蔵文化財課長　上原正秀　　管　理　係　長　小林泰子

埋蔵文化財係長　草間芳行

埋蔵文化財係　高村博文　林　幸彦　三石宗一　須藤隆司　小林真寿

羽毛田卓也　富沢一明　上原　学

調査担当者　市村勝巳　金原　正　新海節夫　林　幸彦

調査主任　佐々木宗昭　　調査副主任　堺　益子

調　査　員　上原　希　遠藤しづか　江原富子　小田川　栄　金森治代　香山優子　桜井牧子

長岡喜代人　成沢富子　羽毛田香里　橋詰勝子　橋詰信子　花岡美津子

細萱ミスズ　堀籠　因　依田洋一　和久井義雄　渡辺久美子

岩村田高校生　安藤俊樹　岩下一宏　上原誠一　伊藤正朝　大須賀千尋　木内健一　木内ひろみ

北山浩一　黒沢武彦　黒沢みゆき　神津伸次　後藤隆行　小林　徹　小林久雄

小山　進　小山仁志　佐々木大輔　佐々木秀明　佐藤達也　渋川貴之　清水一郎

清水　哲　平　直樹　土屋俊行　土屋友宏　戸谷　剛　中条泰勝　比田井昭永

三浦健明　宮下貴広　宮本雄一　柳沢　敦　由井克彦　由井　徹

野沢南高校生　重田栄治

臼田高校生　小池貴子　小谷野桂子　桜井和典　柳沢浩司

## 3　遺跡の位置と周辺遺跡

西一本柳遺跡Ⅰは、一本柳遺跡群のほぼ中央に位置し標高694mを測る。佐久市岩村田市街地の南部から西に展開する湯川右岸の細長い約１kmの台地には、東から上の城遺跡群、一本柳遺跡群、北西ノ久保遺跡が知られている。これらの遺跡群の間には、明確に遺跡同士を区切る自然地形はは見あたらない。

市街地に近いため以前から宅地化が進んでいる。このため、昭和43年度の佐久市開発公社による宅地造成に伴い古墳時代後期住居址５軒が緊急発掘調査された東一本柳遺跡をはじめとして、上の城遺跡群上の城遺跡、上の城遺跡群西八日町遺跡、東一本柳古墳、また一本柳遺跡群の北一本柳遺跡、西一本柳遺跡１、西一本柳遺跡Ⅰ、西一本柳遺跡Ⅱ、さらに北西ノ久保遺跡１次・２次・３次・４次などの発掘調査がなされ、多くの弥生時代中期から平安時代の集落や弥生時代～平

安時代さらに中世・近世の墳墓等が検出されている。

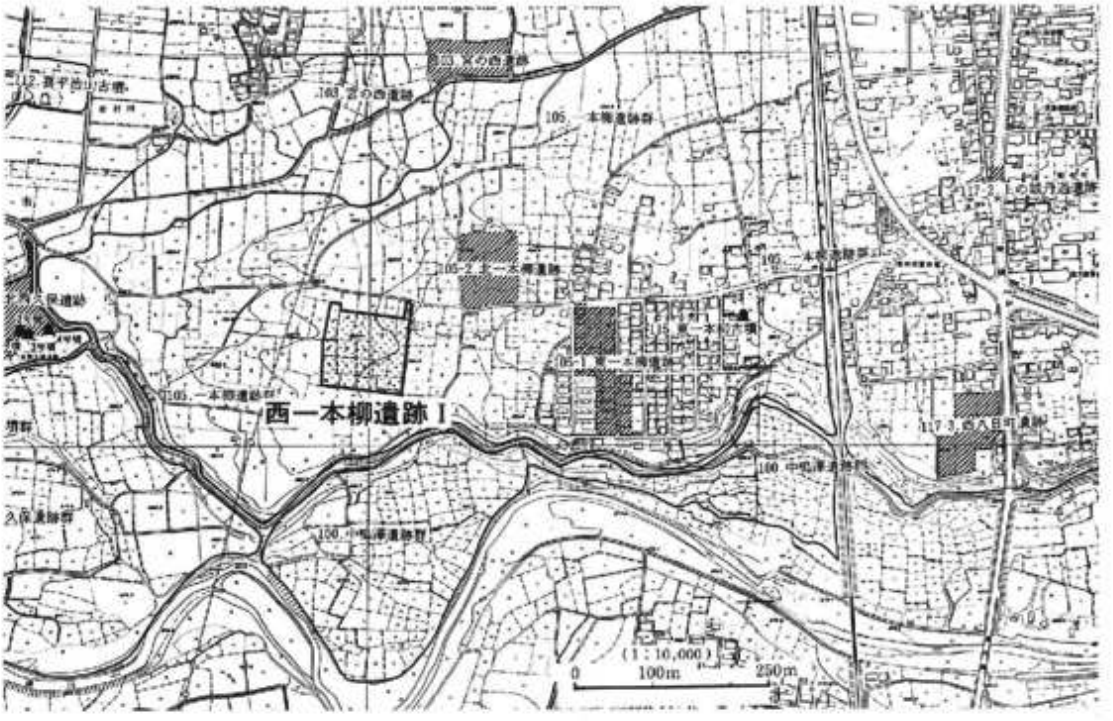
上の城遺跡からは古墳時代後期から平安時代の住居址47軒と倉庫とみられる掘立柱建物址１棟等、西八日町遺跡からは弥生時代中期から平安時代の住居址147棟などが調査されている。

東一本柳古墳からは、轡をはじめとした銅地金張りの杏葉・辻金具などの馬具が出土している。北一本柳遺跡では弥生時代後期住居址７軒・平安時代住居址10軒・土坑51基が調査され、中一本柳遺跡の試掘調査では弥生時代中期～平安時代の住居址33軒等が確認されている。

西一本柳遺跡Ⅱの調査対象地は、台地を南北に横断する形となり、やはり弥生時代中期・後期から古墳時代中期・後期、平安時代の住居址　軒等が調査された。遺構は北側に薄く中央から南側にかけて濃密に存在することが判明した。

さらに、継続中であるが西一本柳遺跡Ⅱの西側に隣接した常木用水までの地点が、西一本柳遺跡１として試掘調査が実施されていて、同様に弥生時代中期・後期から古墳時代中期・後期、平安時代の住居址が約110軒確認されている。

北西ノ久保遺跡第１次～４次の調査では、台地上から弥生時代中期・後期、古墳時代中期、平安時代の集落や弥生時代方形周溝墓・木棺墓群、古墳時代中期古墳群・埴輪大量出土の円墳を含む後期古墳群、近世土坑墓群が調査され、台地から続く斜面からは中世の五輪塔等の石塔婆群が検出されている。




第２図　西一本柳遺跡Ⅰと周辺遺跡（1:15,000）

# II　遺構と遺物

平成３年度の岩村田高校第２グランド造成に関しての調査では、バックネット建設部分から古墳時代後期の住居址２軒、掘立柱建物址３棟が調査された。また、盛り土される部分の概要を知るため試掘調査トレンチ内の弥生時代中期のＨ３号住居址とＤ１号土坑も部分的な掘り下げを行った。

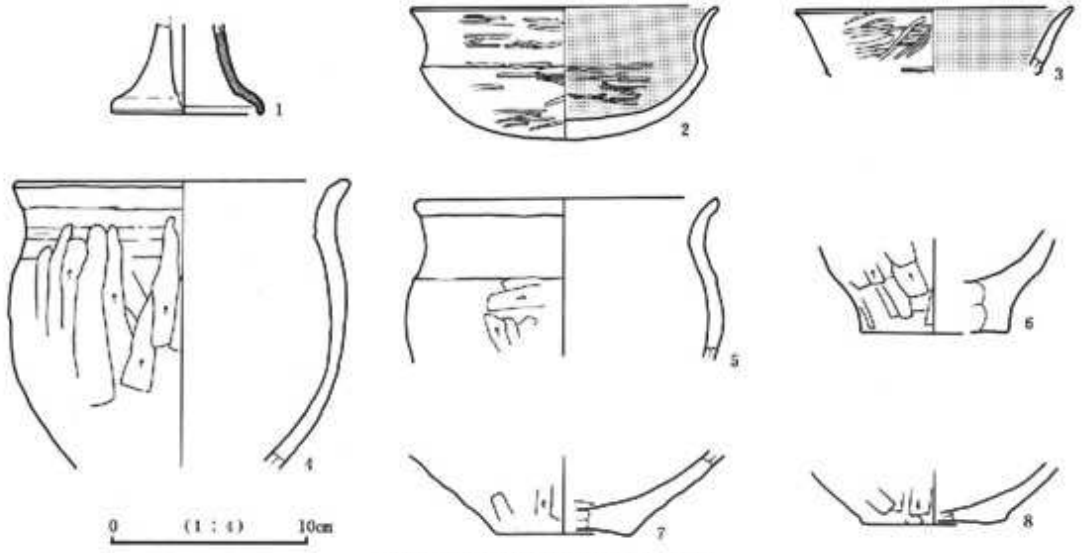
掘調査は10,108㎡の対象地に南北に６本、東西にも６本の幅約２ｍトレンチを入れ行った。その結果、遺物は弥生時代中期・後期、古墳時代中期・後期、奈良平安時代、中世それぞれの土器・石器が多量に出土した。さらに、時期の決定は難しいが弥生時代から平安時代の住居址70軒以上、掘立柱建物址、土坑、溝状遺構が多数確認された。

平成４年度の岩村田高校第２グランドに付属する器具庫・部室建設予定地内の調査では、弥生時代中期の住居址２棟と溝状遺構１条を検出した。

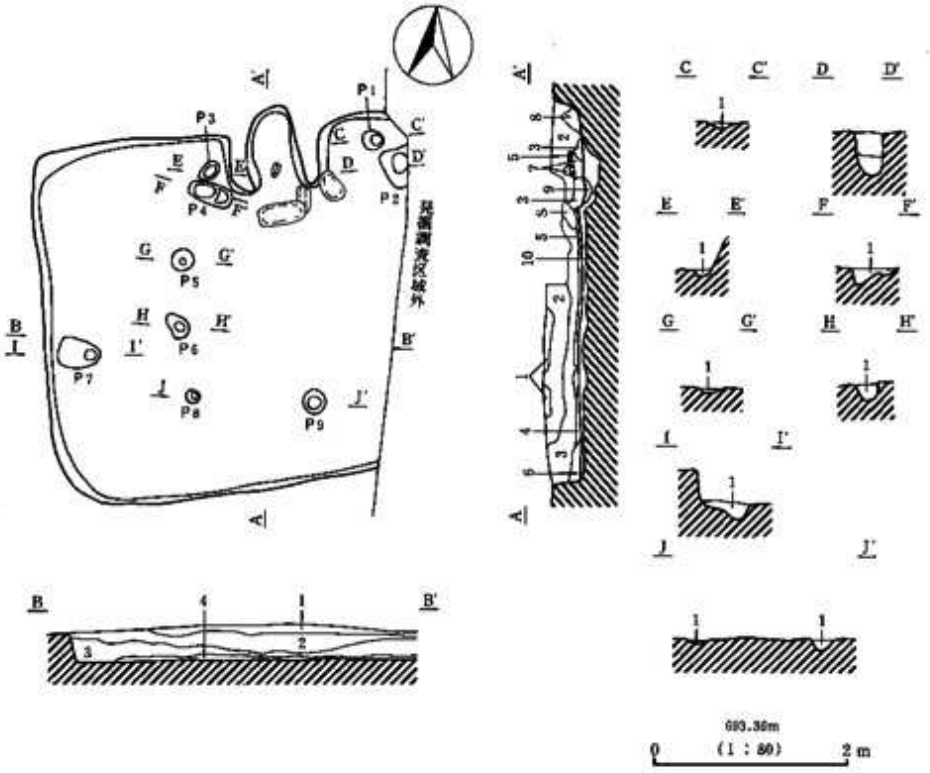
## 1　Ｈ１号住居址

調査区の北側バックネットの工事がおよぶ範囲から検出された。東側は農道にかかるため未調査となった。

南北3.7m東西は検出された長さで3.9m推定4.5mほどになると思われ、隅丸の主軸が短い長方形の平面形態とみられる。壁残高は、23～33cmを、南北軸方向はN－13°－Wを測る。




第３図　Ｈ１号住居址出土土器実測図




1層　黒褐色土　7.5YR3/2　粘性弱。ローム細粒微量含む。

2層　黒褐色土　10YR2/3　ロームをブロック状に20～30%、軽石粒を点々と含む。

3層　黄褐色土　10YR5/6　2層の黒褐色土(炭化物混)をブロック状に40～50%、軽石粒含む。

4層　暗褐色土　75YR3/3　軽石粒を微量含む。

5層　焼土。

6層　ローム、黒褐色土、炭が混在。灰を多量に含む。

7層　暗褐色土　5YR3/3　焼土5YR5/8炭粒(1cm)を含む。

8層　3層に焼土粒(1cm)を点々と30%含む。

9層　3層に焼土・炭粒を多量に含む。

10層　暗褐色土　10YR3/3　貼り床、パミス(0.5～2cm)ローム粒子を多量に含む。

P1　1層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒子を少量含む。

P2　1層　黒褐色土　10YR2/2　パミス(極小)を微量含む。

　　2層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒子を少量含む。

P3　1層　黒褐色土　軽石粒・黄白色土(にぶい橙色土7.5YR6/4)を含む。

P4　1層　黒褐色土

P5　黒褐色土　軽石粒がとぶ。

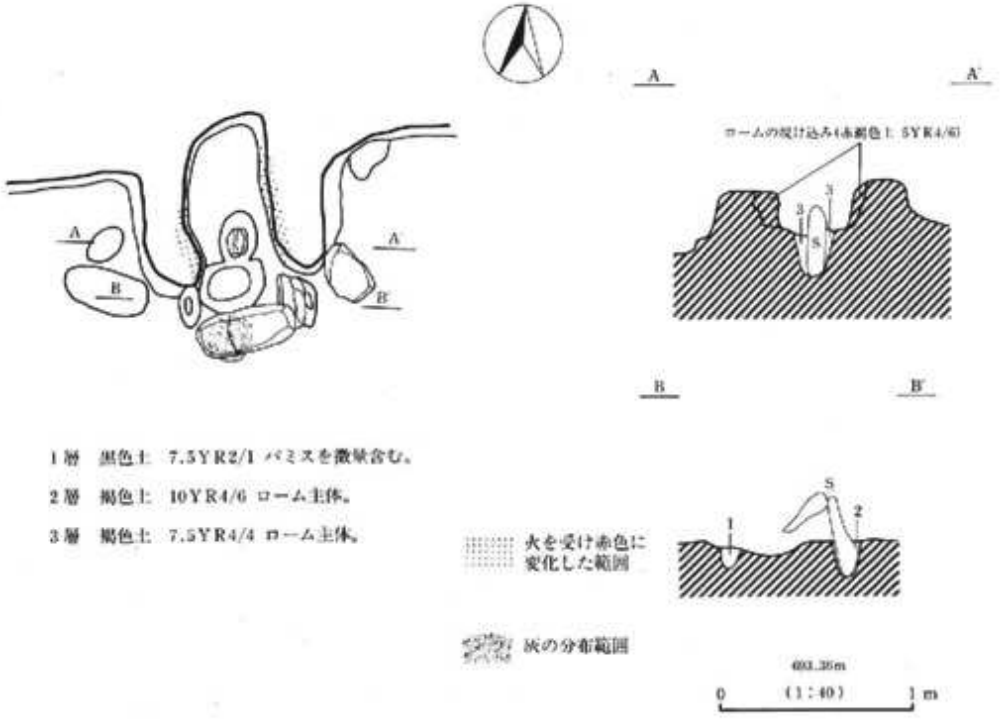
P6　黒褐色土　軽石粒がとぶ。

P7　黒褐色土　黒色土(炭化物混)ローム粒子含む。

P8　黒褐色土　ローム粒・軽石粒・炭粒がとぶ。

P9　褐色土　黄褐色土ブロックを含む。炭粒がとぶ。

第4図　H1号住居址実測図




第5図　H1号住居址カマド実測図

床面は全体にバリバリに硬く敲きしめられて平坦であった。床面下の掘り方は、4～10cmの深さで貼り床はローム粒子を多量に含む暗褐色土を主に用いていた。

覆土は大きく4層に分層できた。第6層は南壁付近のみにみられた。第3層の上面で第2層中には第2層の黒褐色土とロームおよび多量の焼土が混じる土坑状の堆積がみられ、第3図4の土師器甕が倒立した状態でみられた。さらに、この甕に接合する他の破片もこの土坑状の堆積下部にみられた灰層の中から出土した。第2・3層にはブロック状のロームが多量に含まれ、先述のの状況ともあわせ人為的な堆積と考えられる。

カマドは北壁のほぼ中央部に設置され、袖の基部と支脚石が残るだけで、他は崩れていた。人為的に形成された覆土第3層が、カマド火床面まで堆積しており覆土第3層の形成時にはすでにカマドは使用時の姿を留めていないことになる。カマドは、地山を掘り残し袖基部としている。袖先端部東側には芯としていた安山岩礫が残っている。西側の小ピットは礫を抜き去った痕跡であろう。東側の床面にみられた安山岩礫がそれであろうか。天井石が東側の袖石に乗る状態で検出された。火床付近は、あらかじめ床面の掘り方よりも深く掘られている。

図示した出土遺物には、須恵器高坏、土師器坏・甕・小形甕がある。

第３図１は、須恵器高坏で３層内から出土した。脚部片で透かしがうかがえる。この高坏片とは別個体の須恵器高坏とみられる小片もある。須恵器は他に坏の小片１点のみが出土している。２・３は土師器坏でともに外稜を持ち、内面黒色処理される。この他に５個体ほどの坏片がある。２はカマド東側の床面上、３は覆土第２層内の出土。４・５は土師器小形甕で、短い胴と短く緩く外反する口縁部を持つ。胴部はヘラケズリされる。４は覆土第２層内の土坑状堆積土内からの出土で、倒立した破片と灰内に横たわった破片、さらに、カマド付近の第２層出土片とが接合した。５は第２層と３層内からの破片が接合した。６も土師器小形甕の底部で覆土第３層出土、７・８は土師器甕で７が第２層、８が第３層からの出土。土師器甕は、この他に分厚い長胴甕や球胴を呈する甕の小片がある。

これらの土器は古墳時代後期の様相を示し、本住居址の帰属時期としたい。

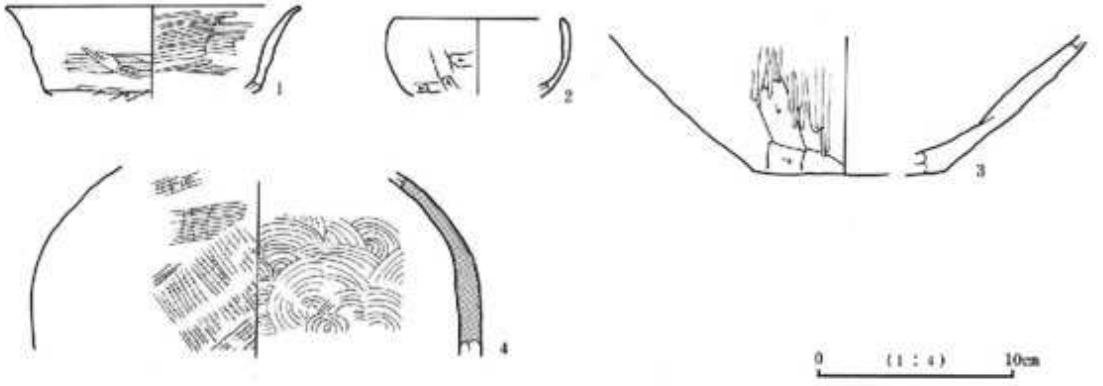
## ２　Ｈ２号住居址

本住居址は、Ｈ１号住居址の西側に近接して検出された。南北3.6m東西4.0mのやや東西に長い隅丸方形を呈する。壁残高は53～56cm、南北軸方向Ｎ－10°－Ｗを測る。床面は主柱穴で囲まれる方形内がもっとも堅緻であった。

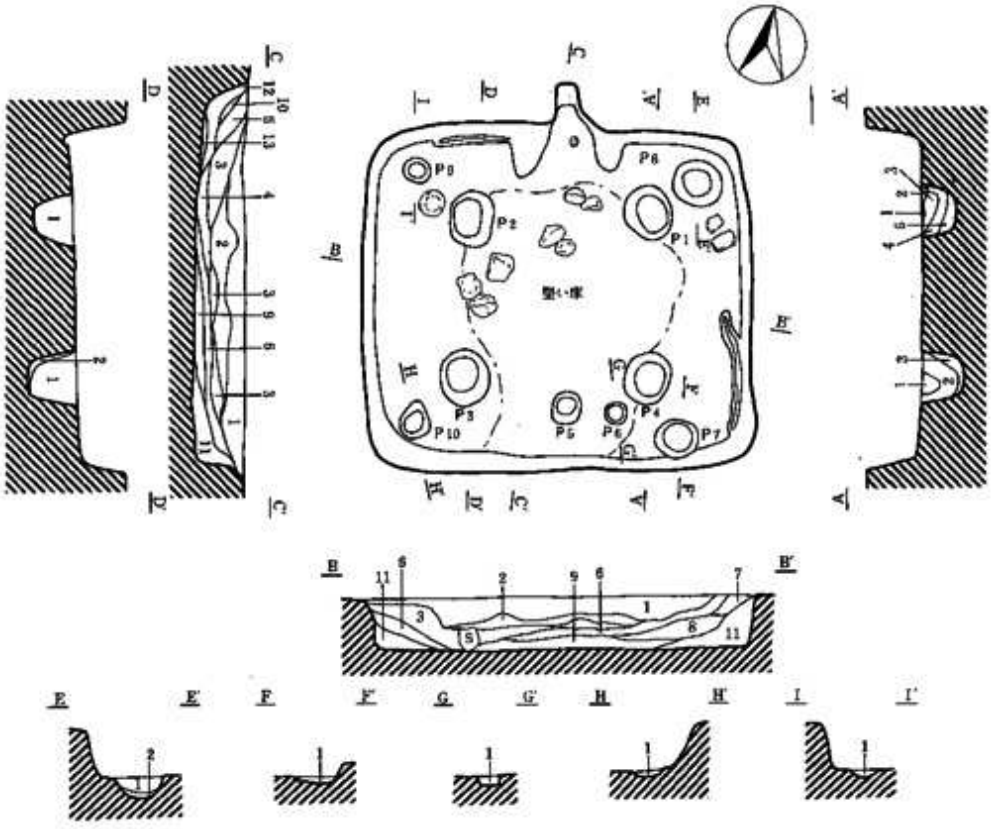
ピットは10個確認され、主柱穴のＰ1～Ｐ4が柱穴間約1.8mの方形に配されていた。平面形態は径40～50cmの円形を基調とし、深さはそれぞれ40・43・44・42cmを測る。さらに、径30～50cm深さ５～20cmのピットが、この４個の柱穴の外側壁際に４個検出された。主柱補助柱の存在が考えられようか。南壁際には２個のピットがあり深さ13・22cmで、位置的に入り口に関した施設であろうか。

壁溝がカマド西側の北壁下と東壁の一部にみられた。幅15cm深さ４～７cmを測る。

カマドは、北壁中央に設置されていた。火床と袖部の一部分が残るだけで崩れていた。構築




第６図　Ｈ２号住居址出土土器実測図




P8　1層　にぶい明褐色土　P7　1層　黒褐色土　暗褐色土　P10　1層　暗褐色土　P9　1層　暗褐色土　暗褐色土

2層　黒　褐　色　土

1層　暗褐色土　軽石粒10%、ロームブロック、黒褐色ブロックを含む。

2層　黒褐色土　明褐色ブロックを含む。

3層　明褐色土　緻密。

4層　暗褐色土　灰色微粒ブロックを含む。

5層　灰　色　土　ローム粒子、暗褐色土を含む。

6層　暗褐色土・黒褐色土　軽石粒微量含む。

7層　暗褐色土

8層　明黄褐色土　軽石粒、暗褐色ブロックを含む。

9層　明黄褐色土

10層　暗褐色土　ロームブロック、灰色微粒を含む。

11層　暗褐色土　軽石粒10%含む。

12層　暗褐色土

13層　焼土。

P1　1層　黒褐色土・暗褐色土

2層　暗褐色土・黒褐色土・暗褐色土ブロック状に含む。

3層　暗褐色土

4層　明褐色土　炭化材を含む。

5層　黒褐色土　ローム明褐色を縞状に含む。

P2　1層　にぶい明褐色土　暗褐色土、灰色土をブロック状に炭化材、地山灰色を含む。

P3　1層　にぶい明褐色土　黒褐色土、暗褐色土、地山灰色土を含む。

2層　黒褐色土

P4　1層　にぶい明褐色土

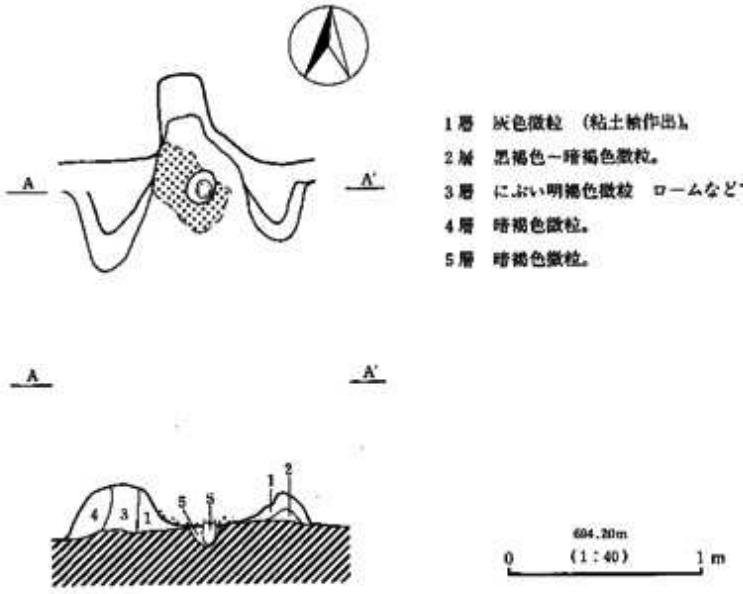
2層　黒褐色土・暗褐色土　明褐色土ブロック状に炭化材を含む。

3層明褐色土

694.20m

0　(1：80)　2m

第7図　H2号住居址実測図



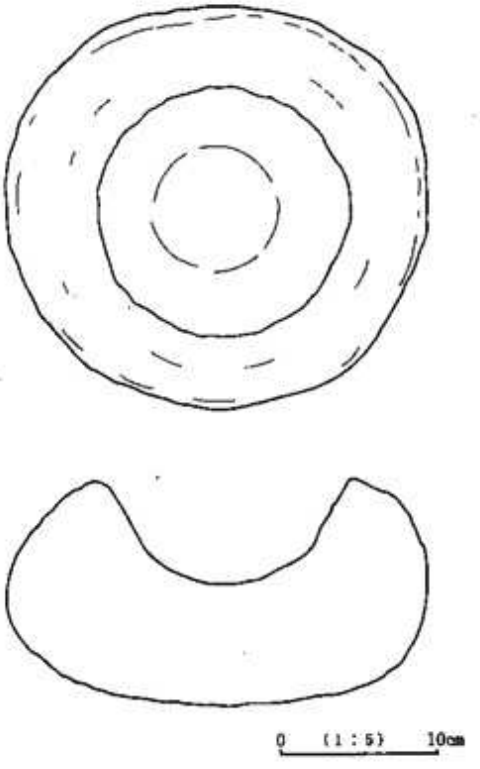

第8図　H2号住居址カマド実測図

材とみられる8個の安山岩が、カマド焚き口部から床面中央にかけて散乱していた。また、多量の粘土もカマド前面の覆土中にみられ、カマドは安山岩を芯として粘土で覆い構築されていたと想定される。僅かに残袖部の基部は、灰色の粘土・暗褐色土・明褐色土でつくられていた。暗褐色土で固定された上部を欠損する支脚石が火床中央に残されていた。両袖に芯とした礫の痕跡の浅い窪みが認められた。

出土遺物には、須恵器甕、土師器坏・甕・甑、石擂鉢と数片の弥生時代後期の土器片がある。

第6図1の土師器坏は外稜を持つ、覆土第2層出土。2は土師器碗で内面丁寧なナデ、外面ヘラケズリされる。3は土師器甕、4は須恵器甕いづれも東側の床面上出土。第9図は多孔質安山岩の石擂鉢で幅26.9cm厚さ14.5cmを測る。北西コーナー床面出土、

出土遺物は、少ないものの古墳時代後期に比定されよう。




第9図　H2号住居址出土石器実測図

## 3　Ｈ３号住居址

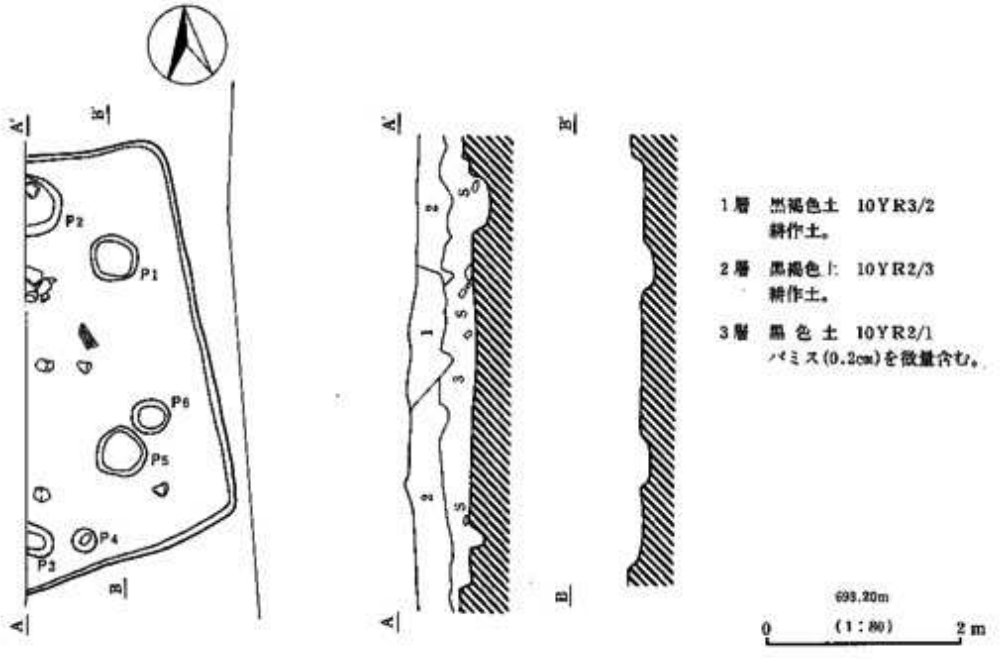
試掘トレンチの精査中本住居址覆土上面から第11図の頸部以下を欠損した人面土器が出土した。

人面土器や土偶形容器の出土は、実際に骨壺として使用するものや、墓壙の中に副葬品として添え置かれている例がほとんどである。このため、人面土器の出土状況を把握するため、トレンチ内に確認された範囲で掘り下げを行った。しかしながら、頸部以下に該当する土器片を検出することはできなかった。

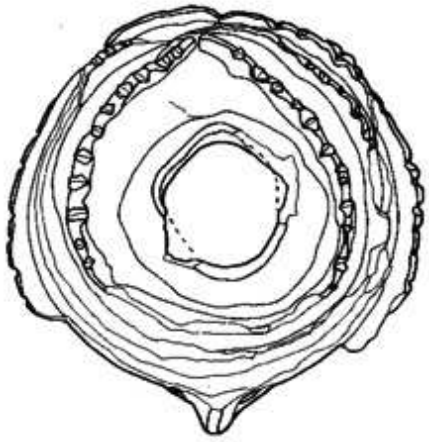
本住居址は、調査区内の北西地点に位置する。掘り下げを実施したのは住居址東側半分で、東壁は4.1mを測る。隣接する同時期の北西ノ久保遺跡で検出された住居址例から、本址の平面形態は４ｍ前後の隅丸方形が推定できる。南北軸方向はN－10′－Wを指し、壁残高は５～10cmを測る。P2とP5が位置と形状から主柱穴かとおもわれるが、深さ10cmと浅い。他に４個のピットがみられるが、南壁際のP3・P4は入り口施設に関したものであろうか。床面は全体に軟弱であった。P2の西側床面に接して５個の安山岩と１個の鉄平石が置かれ、下部に掘りこみはみられない。

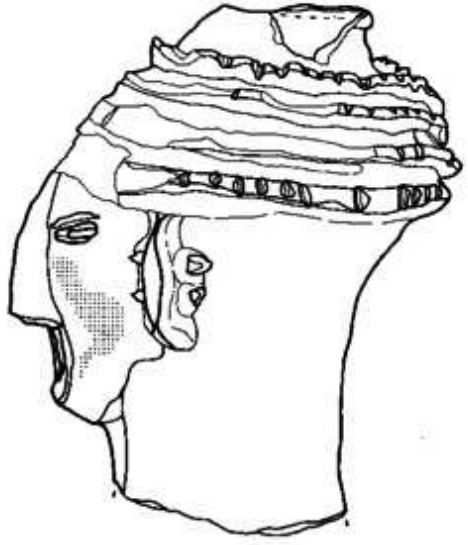
出土遺物は人面付土器の他に、弥生時代中期後半の壺・甕・無頸壺、石質閃緑岩の磨製石斧再加工品、チャートの打製有茎石鏃がある。

人面付土器の残存長は12cmを測る。下部へ続く頸部の角度や調整の特徴は、欠損する下部位は壺の胴部以下が強く想定される。頭部および顔面は、精緻であらゆる角度からも立体的に表現されている。そして、さいたる特徴は、目・口が刳り貫いてあらわされていることである。細長い目

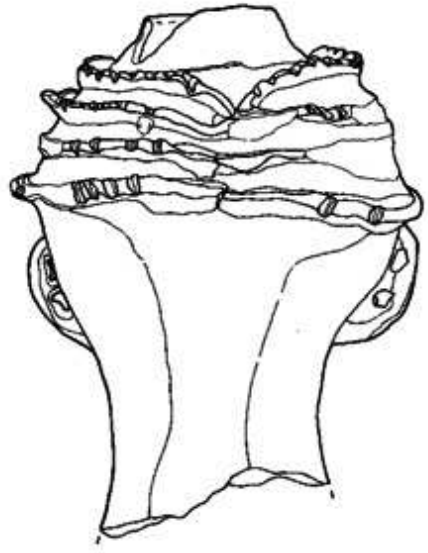



第10図　Ｈ３号住居址実測図







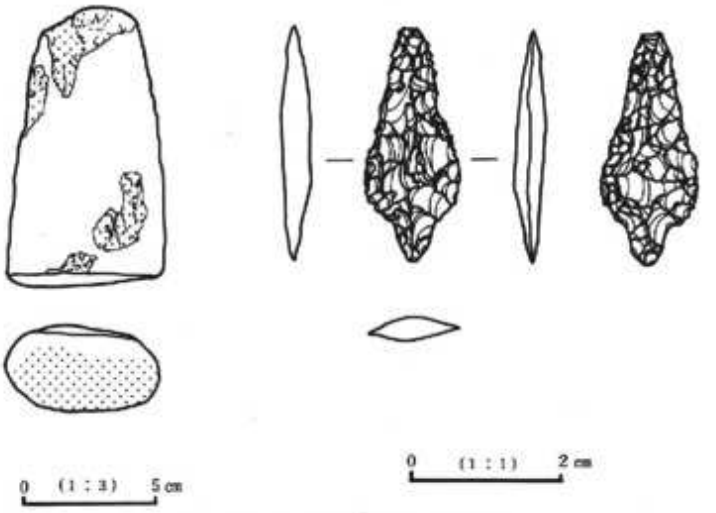
第11図　H３号住居址出土人面土器実測図

の上の沈線は、二重瞼あるいは眉毛を描いたのであろうか。貼付された鼻は高く鼻筋が通る。口は中央に刳り貫きを残し歯を表現したものか。量感のある貼付された耳は、2個の小孔があけられている。頭部には4条の上端にヘラによる刻み目を持つ細い紐状のものが巻かれている後頭部の中央で左右から水平に伸びた先端が僅かに垂れて合わさる。最上段の先端は僅かに隙間をみせている。佐久町館遺跡や丸子町腰越遺跡の土偶形容器頭部にみられる幅広の鉢巻き状のものとは、明らかに異なる表現のしかたであるが、土偶形容器にみられる結髪であろうか。頭頂部には、口径3㎝を測るこの土器の口縁部が直立に近く立ち上がる。また中部高地に多く分布する土偶形容器や東北南部・北関東に多い人面付土器に沈線・刺突による皺や入れ墨は、本例にはない。左頬から下顎にかけてわずかに赤色の塗彩がうかがえる。弥生時代中期初～後期前半の人面付土器に粘土紐を貼り付けたり、ヘラで刻んで表現された目・口・鼻に比べると実に写実性が際だっている。

土偶形容器と人面付土器とは所属時期・分布地域・その性格が共通する点が著しい。また、人面付土器は再葬墓が分布しない地域や、方形周溝墓が出現する時期やさらに後期にもみられることがあり、再葬墓だけでなく住居からも発見されている。

頭部の刻み目・頸部の調整胎土・焼成は、本地域の特徴をよく示すものである。

以上の本址の出土遺物は、弥生時代中期後半に位置づけられる。




第12図　H3号住居址出土石器実測図

第13図　H3号住居址出土土器拓影図

第14図　Ｈ３号住居址出土土器実測図

## 4　Ｈ４号住居址

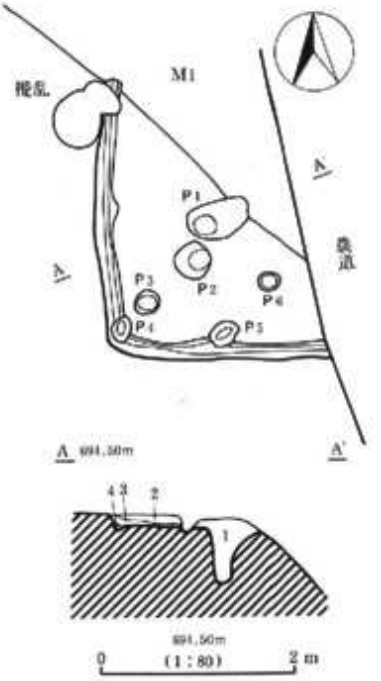
本住居址は、調査区の北東隅から検出された。Ｍ１号溝状遺構に一部破壊され、東側は調査区外へ伸びている。

南壁2.2m西壁2.8mが調査された。南西コーナーは隅丸を呈する。壁残高は14～17cm、南北軸方向はNを指す。

床面は堅緻であったが、遺構自体の残りかたが浅いためところどころ敲き床がはがれている。床面下の掘り方は認められない。ピットは６個確認できたが、深さ68cmのＰ1は主柱穴になろう。

幅12～20cm深さ４～８cmの壁高が各壁直下をめぐっている。

出土遺物は少なく第16図に示したように、弥生時代中期後半の壺の小片が僅かに出土した。




1層　黒褐色土　　3層　黒褐色土
2層　暗褐色土　床ブロックを含む。　4層　褐色土

第15図　Ｈ４号住居址実測図

第16図　Ｈ４号住居址出土土器拓影図

## 5　Ｈ５号住居址

本住居址はＨ４号住居址と同様に、調査区の北東隅から検出された。Ｍ１号溝状遺構に大半を破壊されていた。

隅丸の北東コーナーと北壁0.7m東壁1.1mだけ確認できた。壁残高は28cm内外を測る。床面は、平坦で堅緻なた

第17図　Ｈ５号住居址実測図

め明確に検出できた。

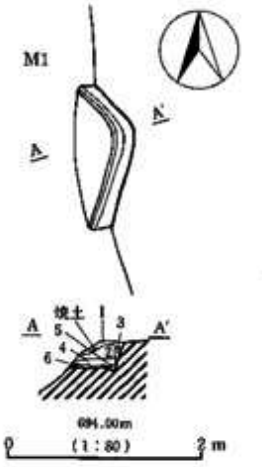
壁溝が確認でき、幅は12cm～18cm、深さは3cmを測る。

出土遺物は少ない。弥生時代中期後半の壺・甕、後期の甕小片がみられる。

## 6　D1号土坑

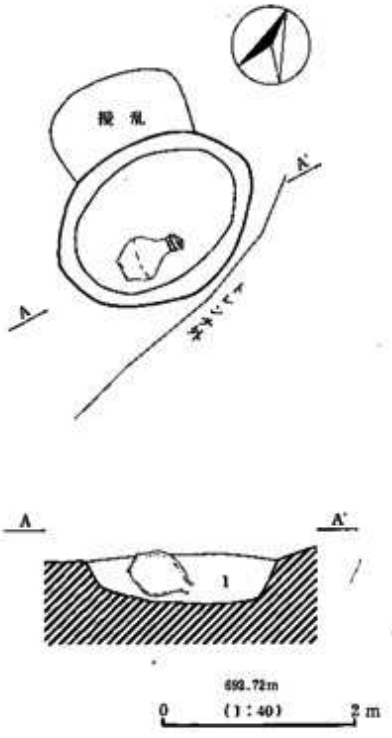
本址は調査区のほぼ中央で検出した。数多い土坑の性格等把握のため掘り下げを行った。

平面形態は楕円形を呈し、長軸110cm短軸84cm深さ26cmを測る。長軸方向は、N－36°－Eを指す。やや南寄りの位置から口縁部を斜め下にした第20図の弥生時代中期後半の壺が検出された。覆土は黒色土1層で、骨粉等はみられなかった。



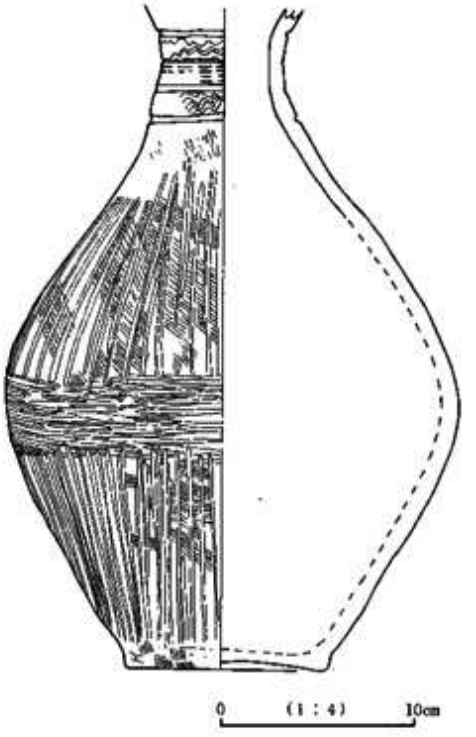

1層　黒褐色土　4層　褐色土
2層　黒褐色土　5層　にぶい黄褐色土
3層　褐色土　6層　黒褐色土

第18図　H5号住居址実測図




1層　黒色土　10YR2/1粒子細かく粘性弱パミス(0.5cm)を微量、パミス(0.3cm)を少量含む。

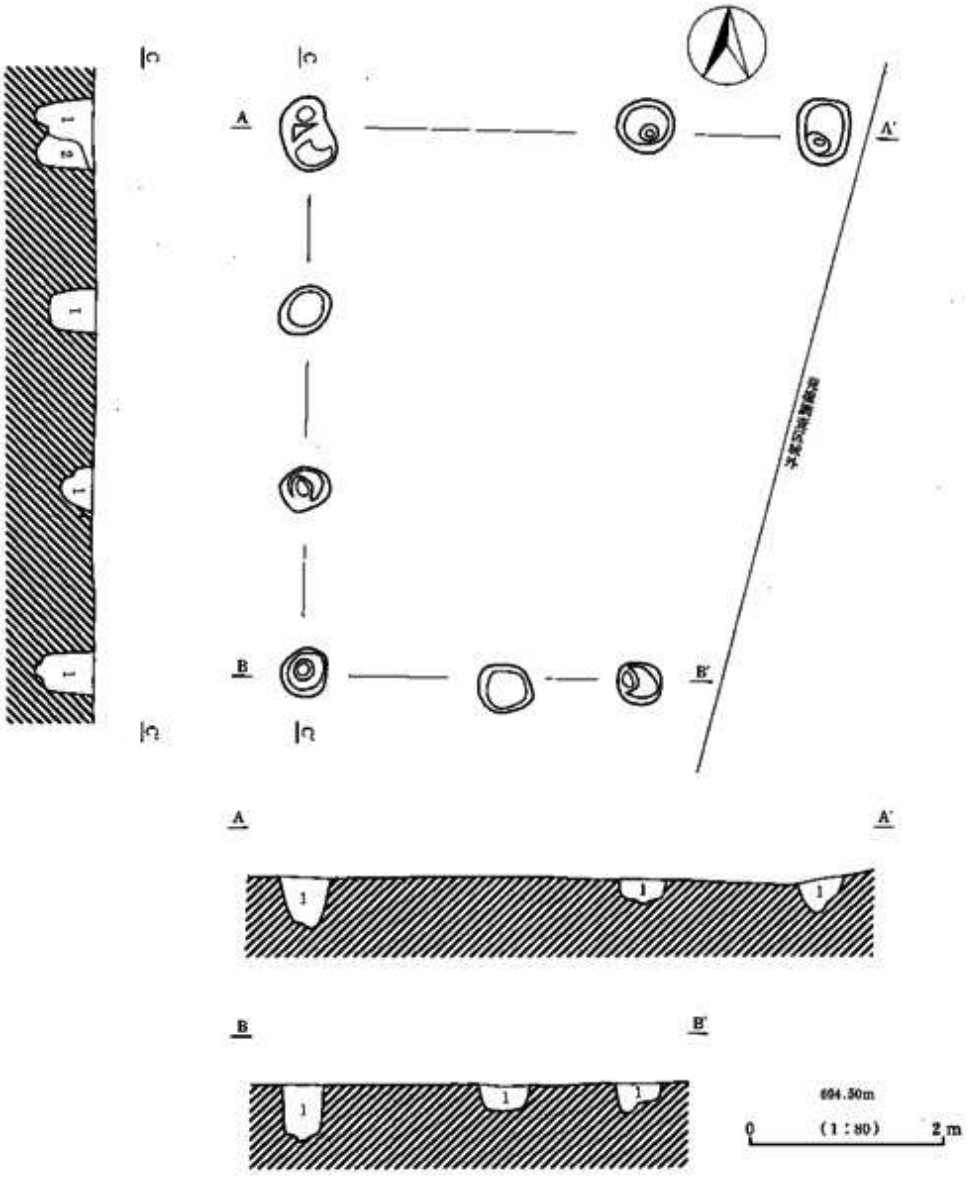
第19図　D1号土坑実測図




第20図　D1号土坑出土土器実測図

## 7　Ｆ１号掘立柱建物址

調査区北東隅から検出された。遺構の一部は調査区外の東側に続く。建物の平面形態は桁行３間以上梁間３間で、柱の配置は側柱式である。長軸（桁行）の方向はN－83°－Eを指す。平面規模は桁行5.9m以上・梁間5.6mを測り、柱間寸法は桁行1.3m～3.3mでばらつきが大きい。梁




1層　暗褐色土　軽石流ブロック少量含む。細砂土壌。しまりなし。

2層　　軽石流ブロック主体土。

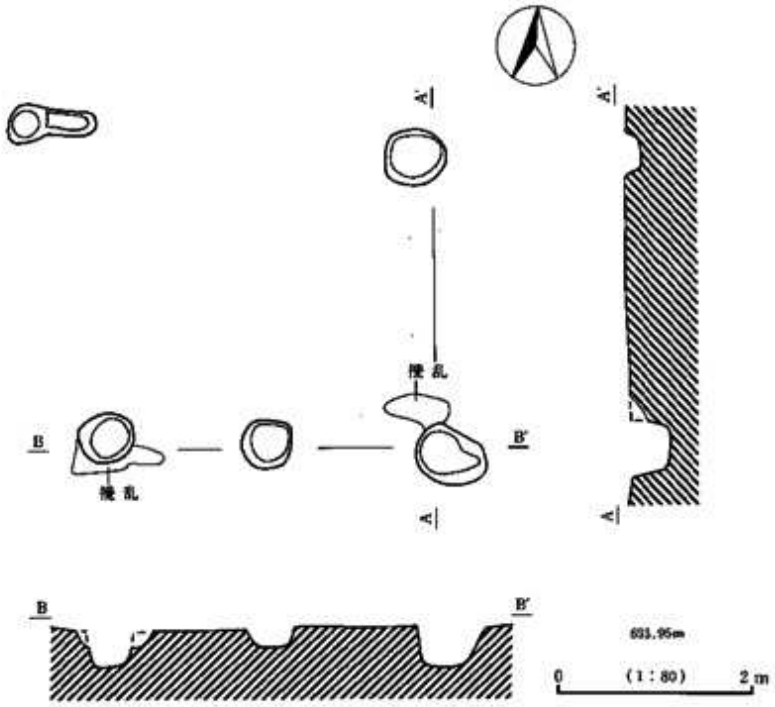
第21図　Ｆ１号掘立柱建物址

間は２ｍ前後で各柱穴間のばらつきが小さい。各柱穴の平面形態は円形が基調で直径40～60cm・深さ31cm～61cmを測り、柱痕部分が一段低い。

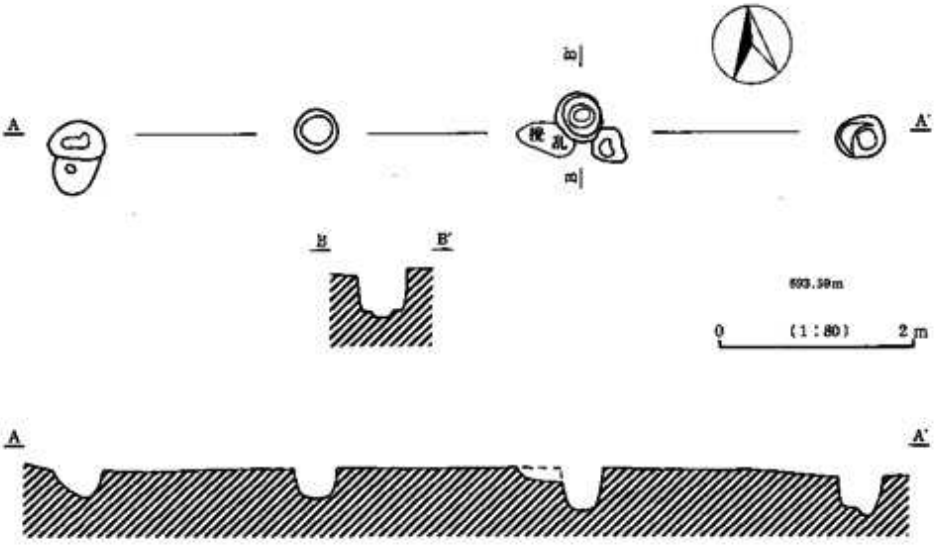
## 8　Ｆ２号掘立柱建物址

本址はＨ２号住居址の北側、Ｆ１号掘立柱建物址の西側に近接して検出された。

建物の平面形態は桁行２間・梁間１間で、柱の配置は側柱式である。長軸（桁行）の方向はＮ－87°－Ｅを指す。平面規模は桁行3.6ｍ梁間3.2ｍを測り、柱間寸法は南桁行が1.8ｍを測る。




第22図　Ｆ２号掘立柱建物址実測図




第23図　Ｆ３号掘立柱建物址実測図

北桁行は北西のピットが西にずれているため形態は歪んでいる。各柱穴の平面形態は、楕円形・円形とがある。直径は50cm前後、深さも17cm～41cmとばらついている。

## 9　Ｆ３号掘立柱建物址

本址の大半は北側の調査区外にある。建物の南側部分だけの検出であった。検出部分がおそらく桁行であろう。平面規模は8.2mを測る大規模なものである。柱間寸法は2.6m・2.7m・2.9mを測りばらつきが少ない。各柱穴の平面形態は円形を基調とし、直径40cm～50cmを測る。柱痕部分が一段低くなるものもみられる。

## 10　Ｍ１号溝状遺構

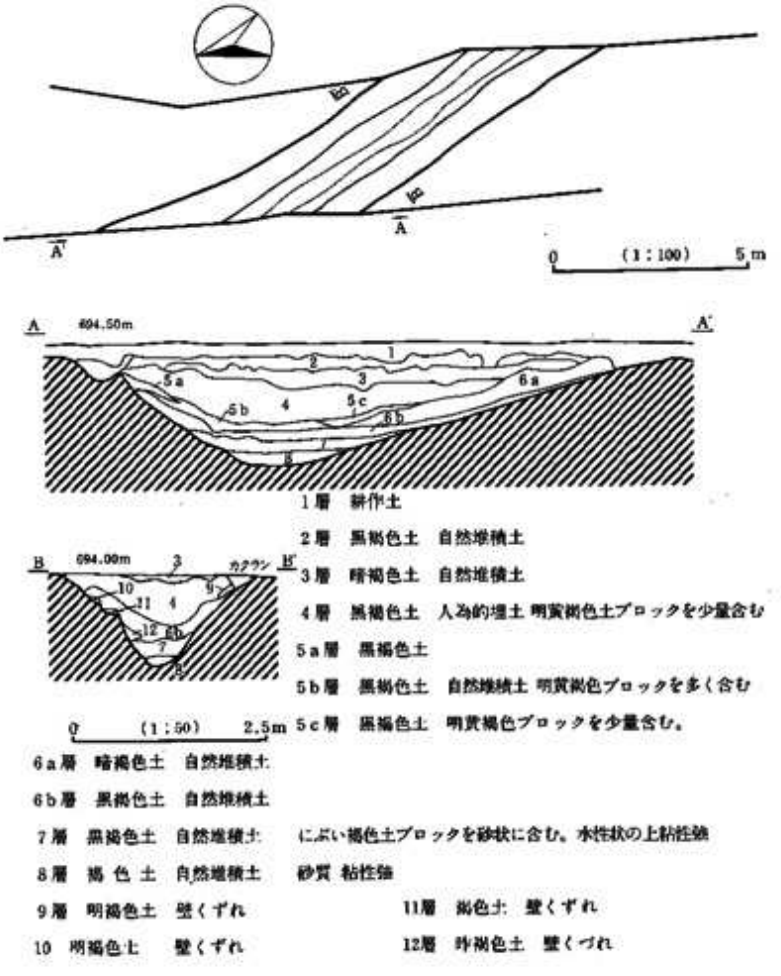
本址は、調査区の北端から検出された。

弥生時代中期後半とみられる２軒の住居址を破壊し、北西と南西方向に伸びている。

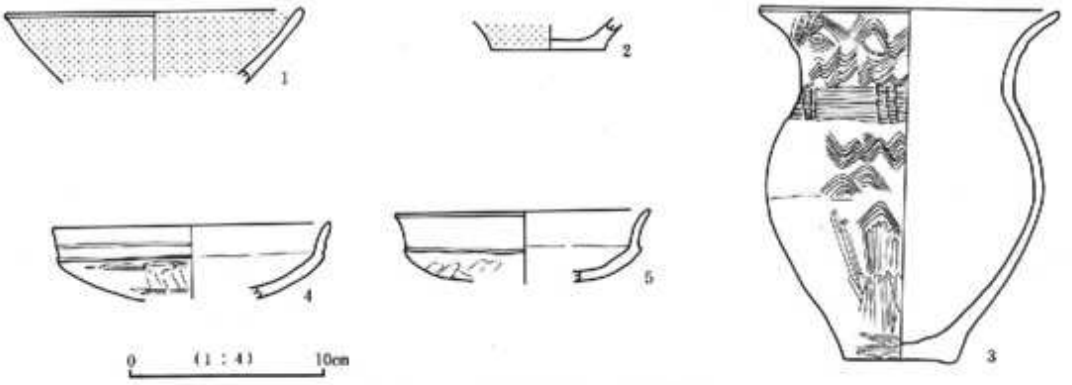
幅2.5m深さ1.04m、底面の幅0.24m～0.5mを測る。

断面形態は、「Ｖ」字形をしている。

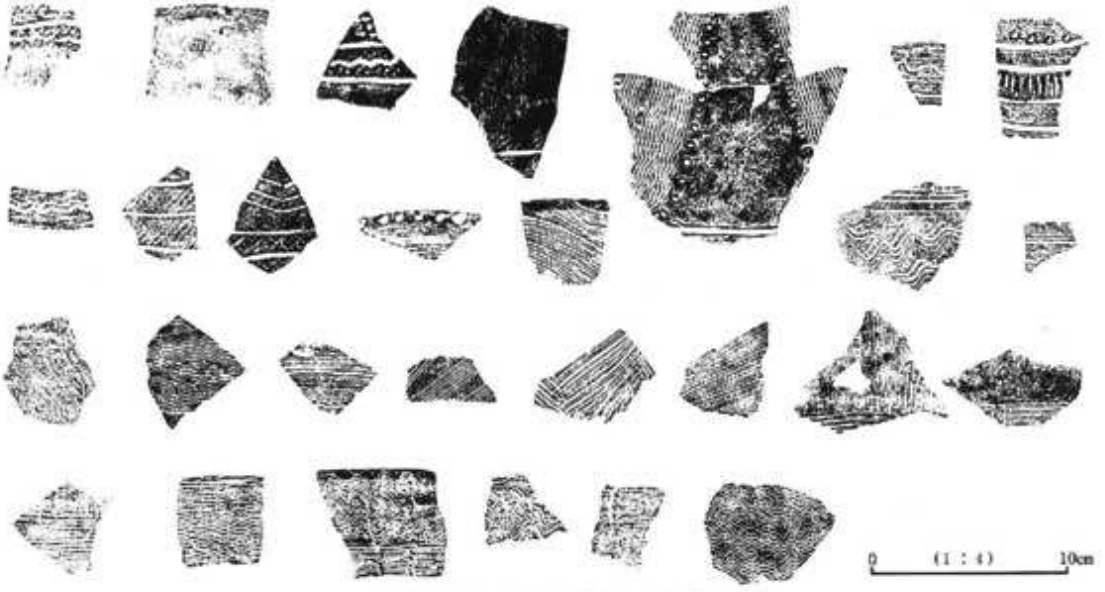
覆土は大きくみると７層に分けられた。４層は褐色土・明黄褐色土をブロック状に含み、人為的埋め土とみられる。第25図４・５などの古墳時代後期の土師器が出土した。５層・８層は壁が崩れたものであろう。６ａ層・６ｂ層・６ｃ層は明黄褐色をブロック状に含み、




第24図　Ｍ１号溝状遺構実測図




第25図　M１号溝状遺構出土土器実測図




第26図　M１号溝状遺構出土土器拓影図

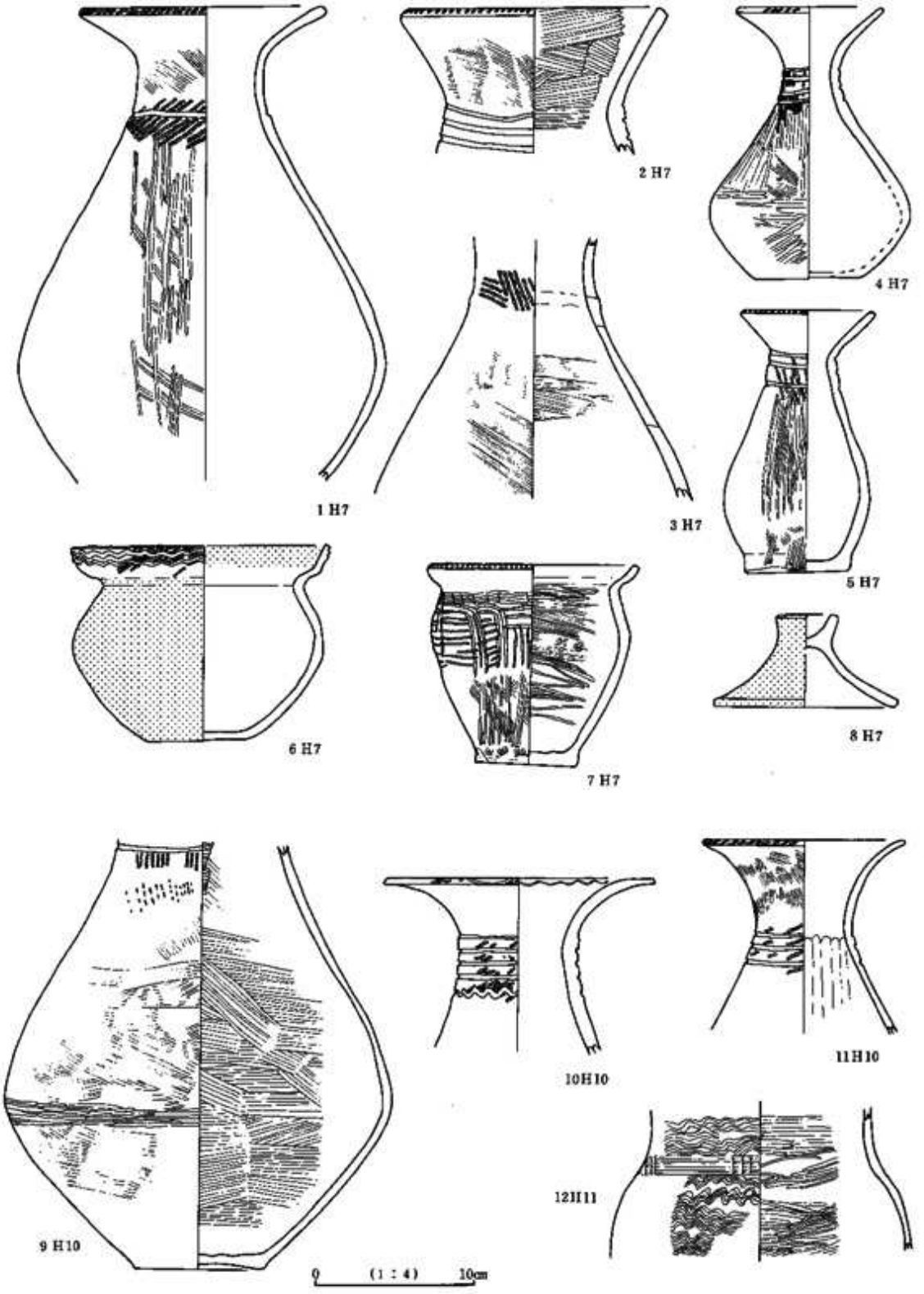
しかも、溝の西側一方にのみ堆積しており、溝の西側に土塁などの盛り土の存在が考えられないだろうか。９層は褐色の砂を含み、ひじょうに堅い。10層もまた褐色の砂質土であった。

６層から下部の土層内からは、弥生時代中期後半・後期の土器が多く出土した。

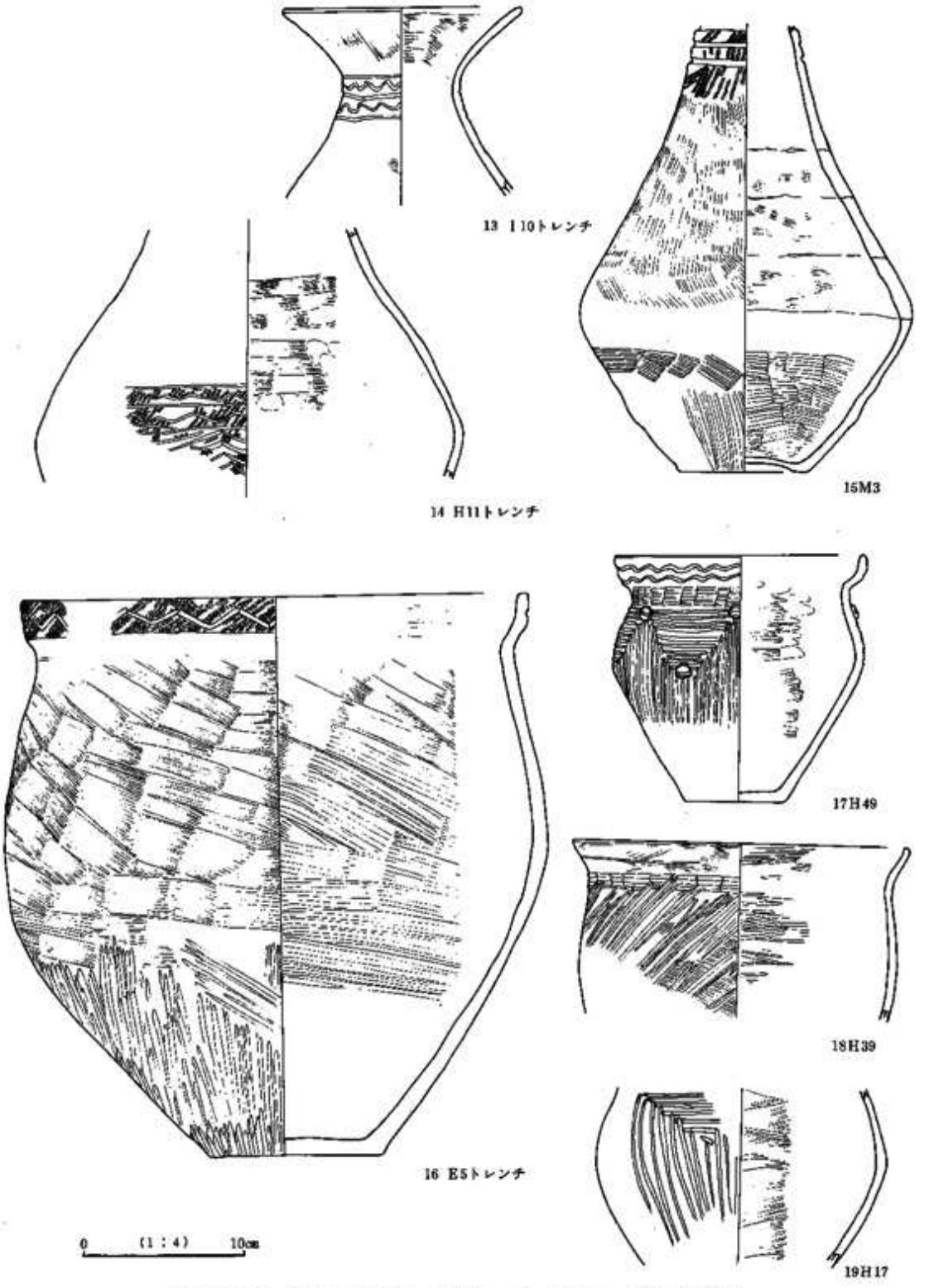
遺物の出土状況は、この溝状遺構は弥生時代に掘られ、古墳時代に若干埋められたと思われる。そして、本調査で明らかになった弥生時代の住居址群や周辺に存在する弥生時代中期後半・後期の住居址群との関連、および溝の断面形態からこの溝状遺構は環濠である可能性が高いといえる。

## 11　西一本柳遺跡Ｉ試掘調査出土遺物

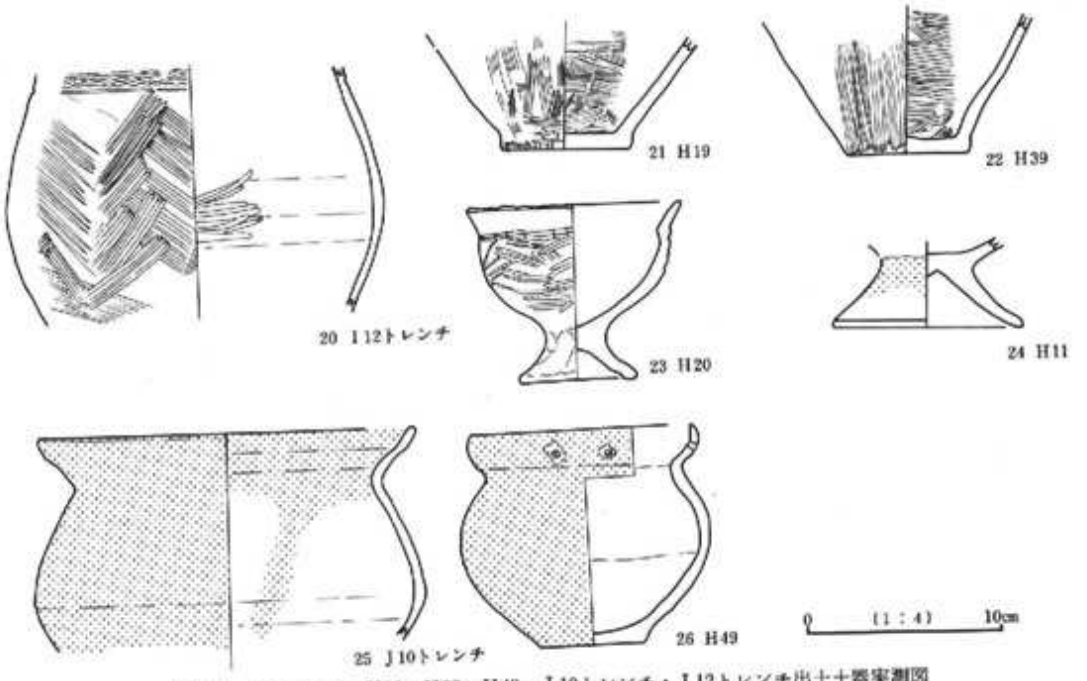
各トレンチから住居址・土坑・掘立柱建物址・溝などの遺構プランが確認され、それらの覆土上部から多くの遺物が出土したので、第27～31図に掲載した。



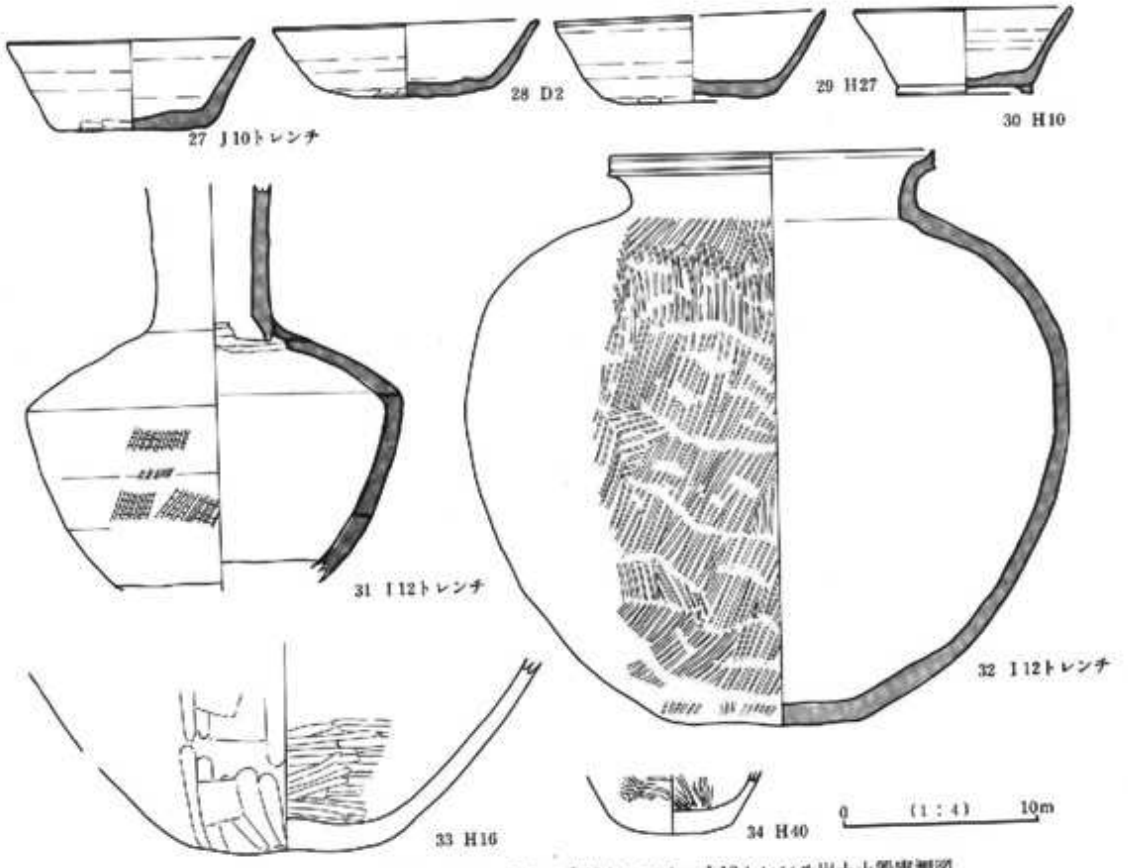

第27図　H 7・H10・H11出土土器実測図



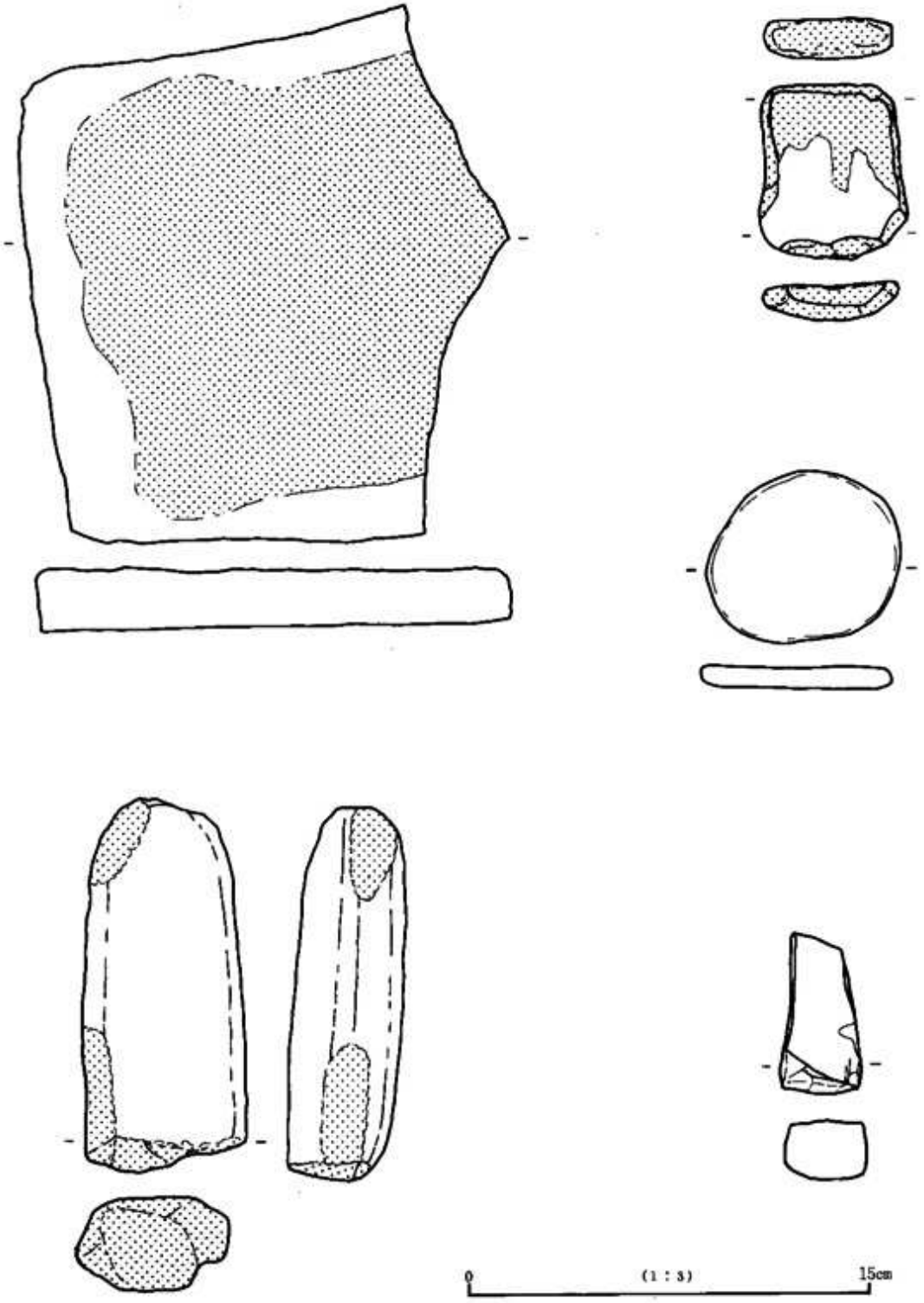

第28図　H11・H39・H49・M3・E5トレンチ・I10トレンチ出土土器実測



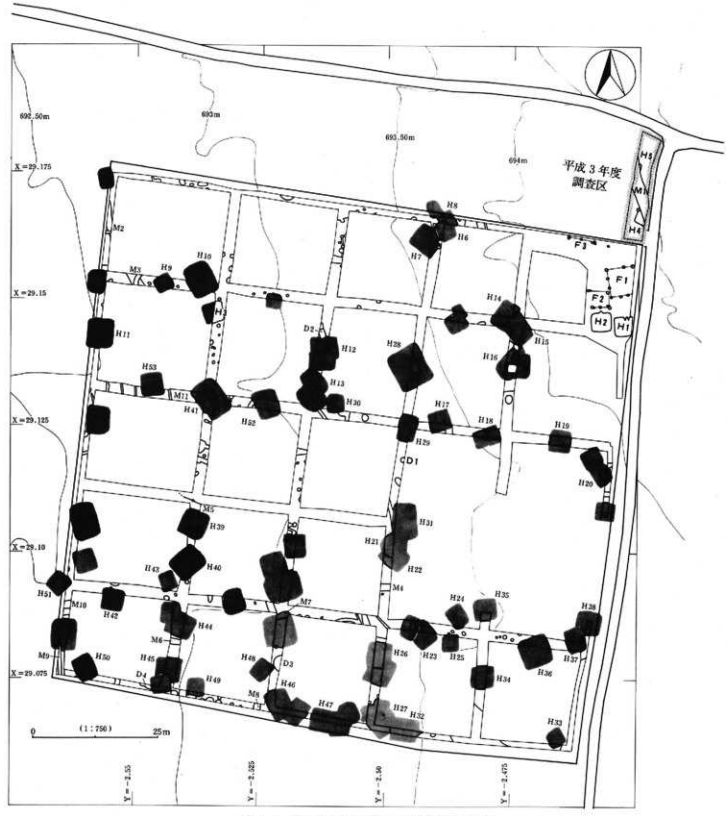

第29図　H11・H19・H20・H39・H49・J10トレンチ・I12トレンチ出土土器実測図




第30図　H10・H16・H27・H40・D2・J10トレンチ・I12トレンチ出土土器実測図




第31図　西一本柳遺跡Ⅰ出土石器実測図

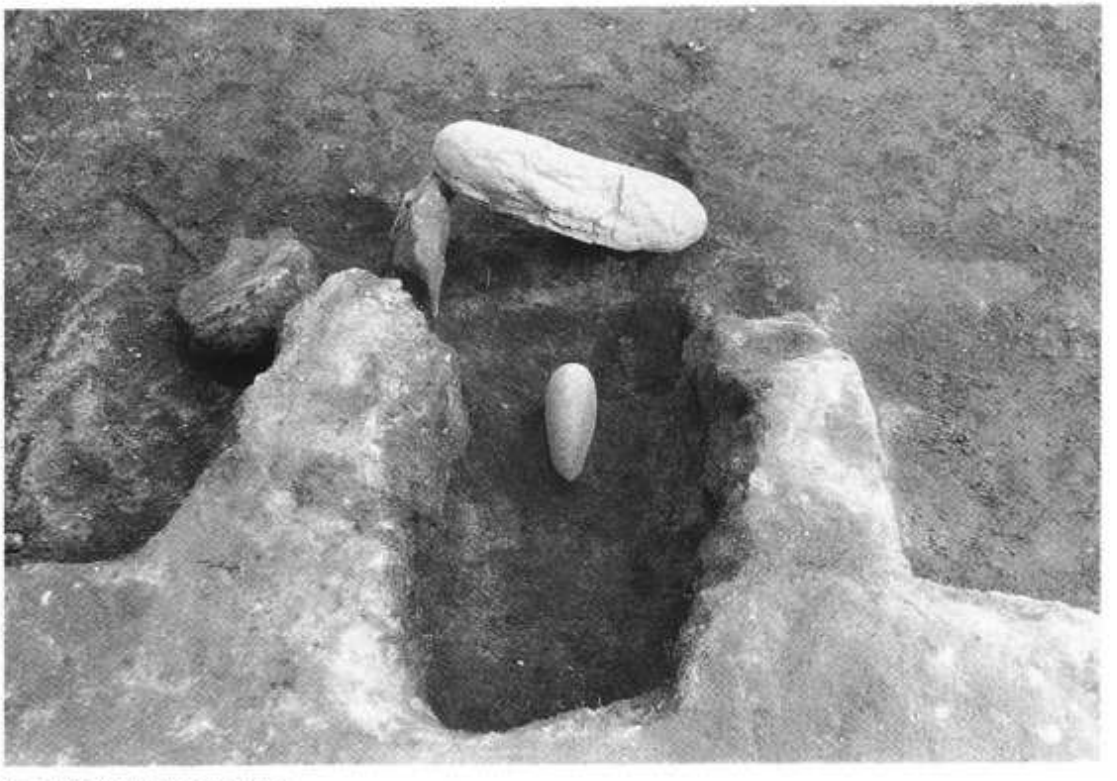



第32図　西一本柳遺跡Ⅰ（平成３年度・４年度）調査全体図

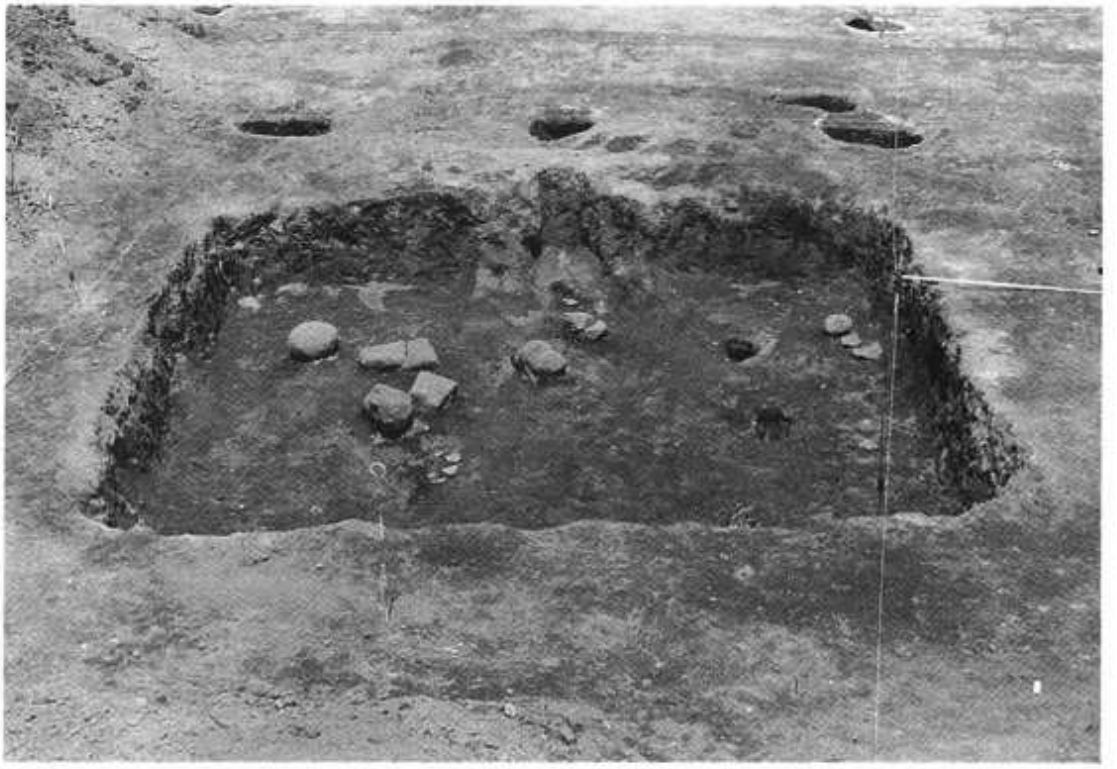
西一本柵遺跡Ⅰ（バックネット部分）調査全景（南から）

H１号住居址全景（南から）

H１号住居址カマド（南から）



H１号住居址カマド（北上から）

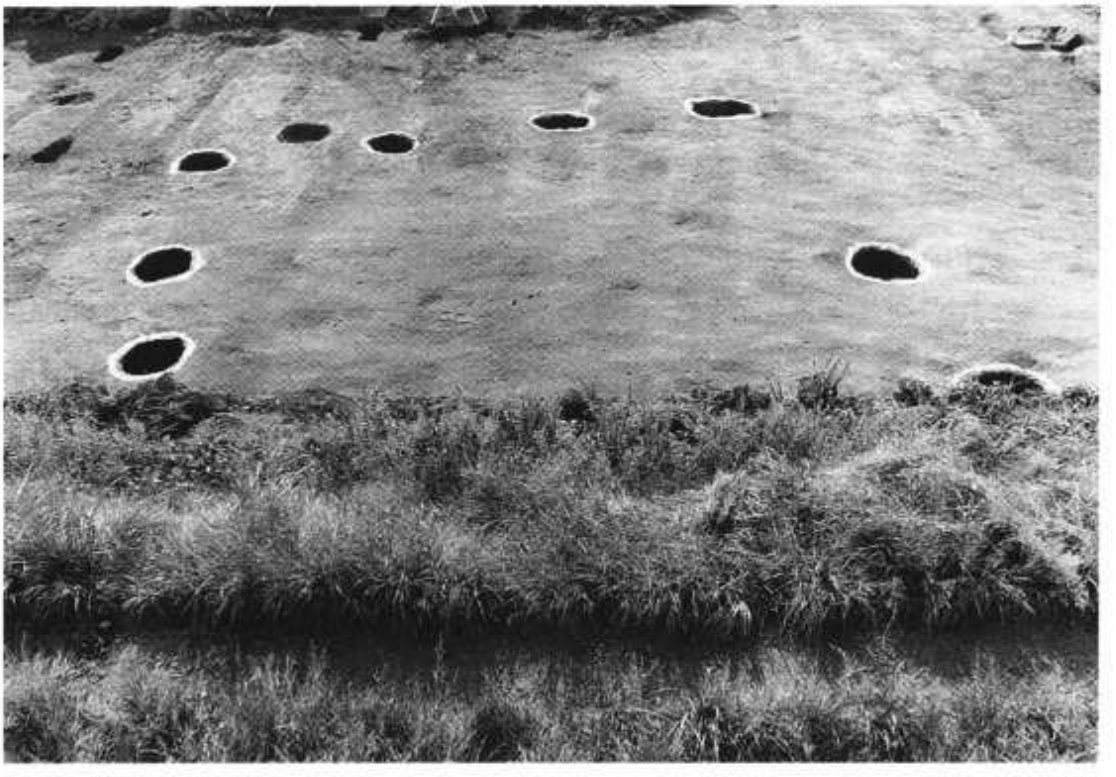


Ｈ２号住居址全景（南から）

Ｈ２号住居址カマド（南から）

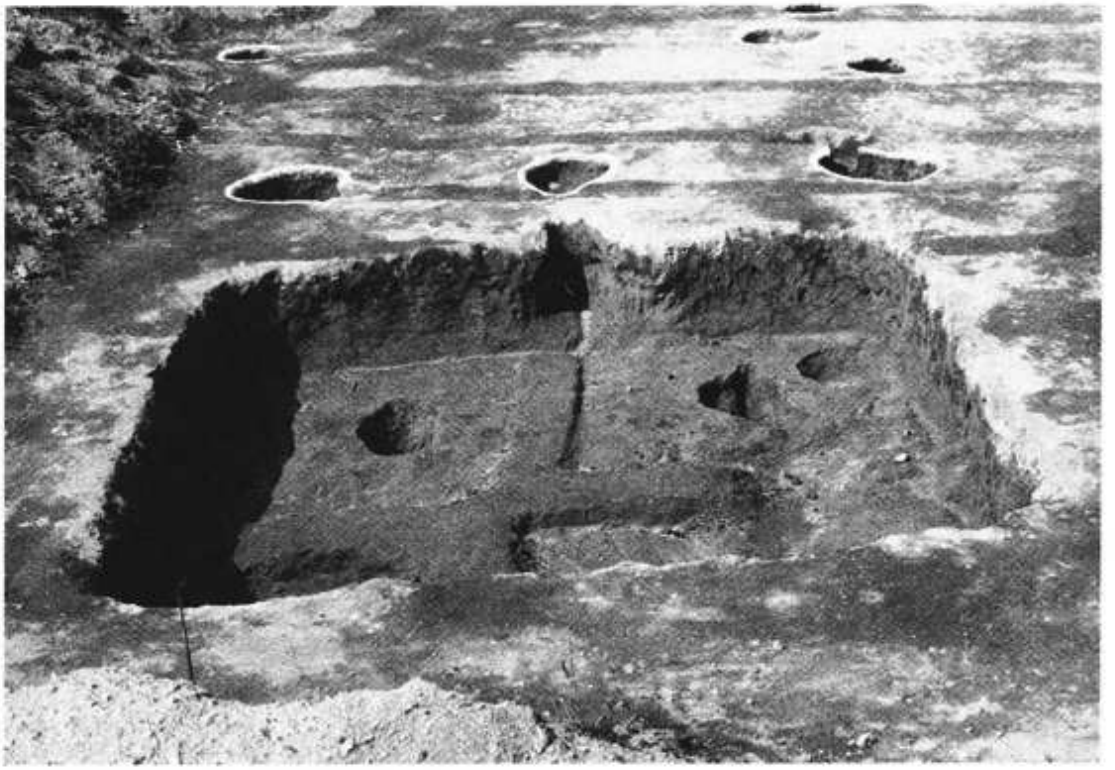
図版四

H３号住居址全景（北から）

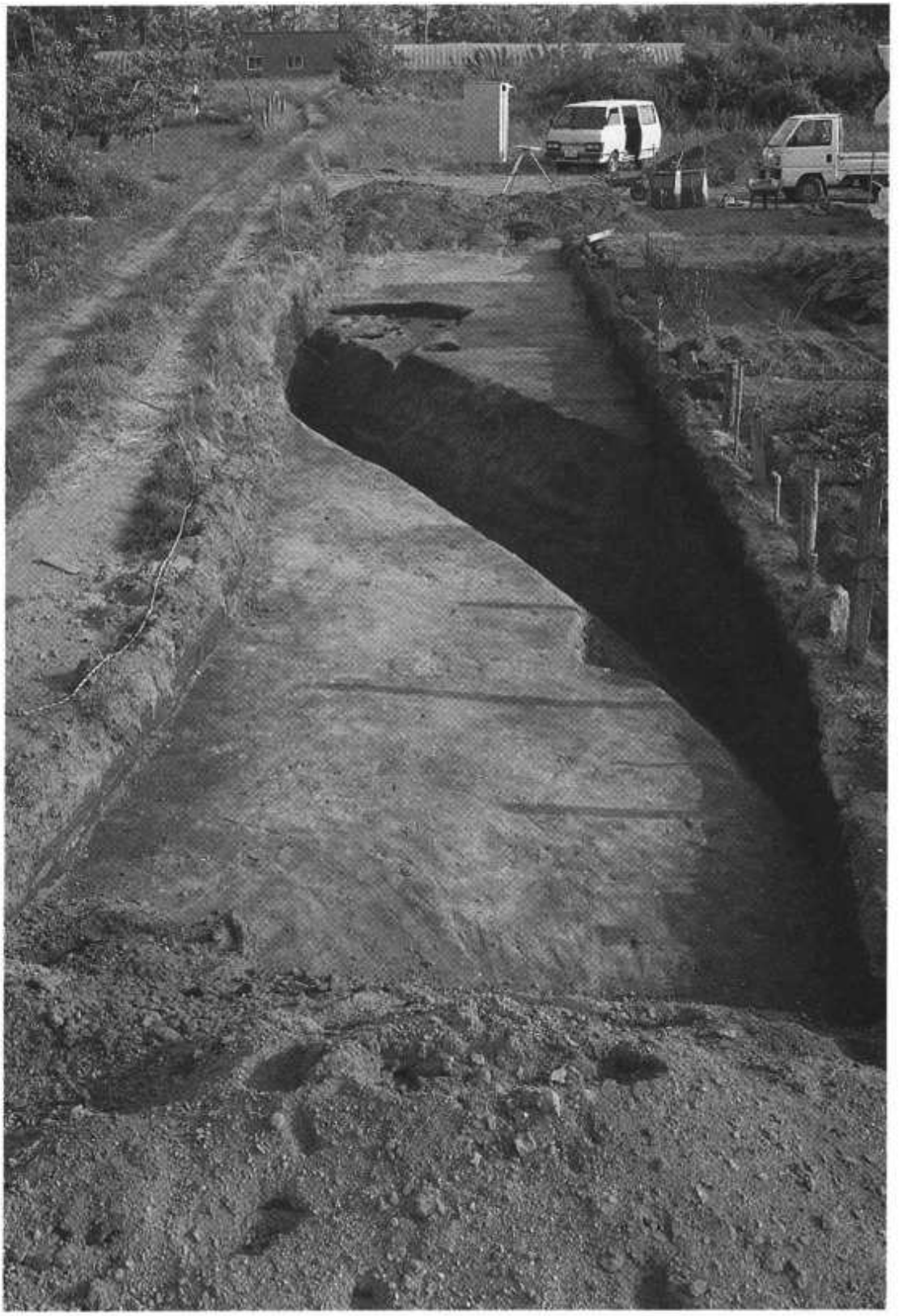


F１号掘立柱建物址（東から）

F１号堀立柱建物址（北から）

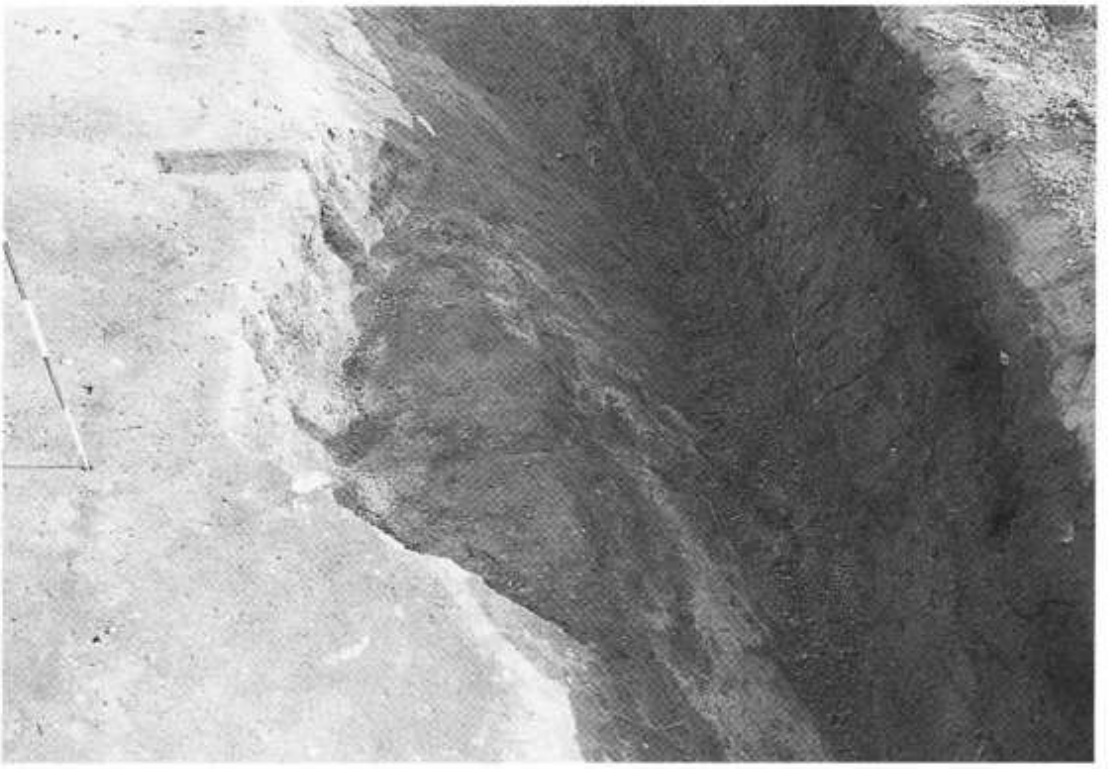


F２号堀立柱建物址・H２号住居址（南から）



西一本柳遺跡Ⅰ（部室・器具庫）調査全景（北から）

H 4 号住居址全景（北から）

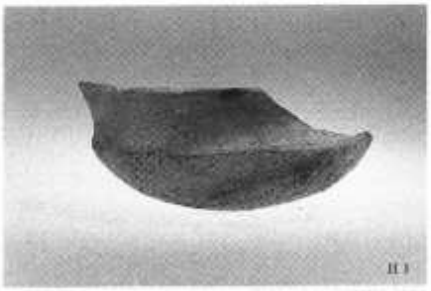


H 5 号住居址全景（北から）

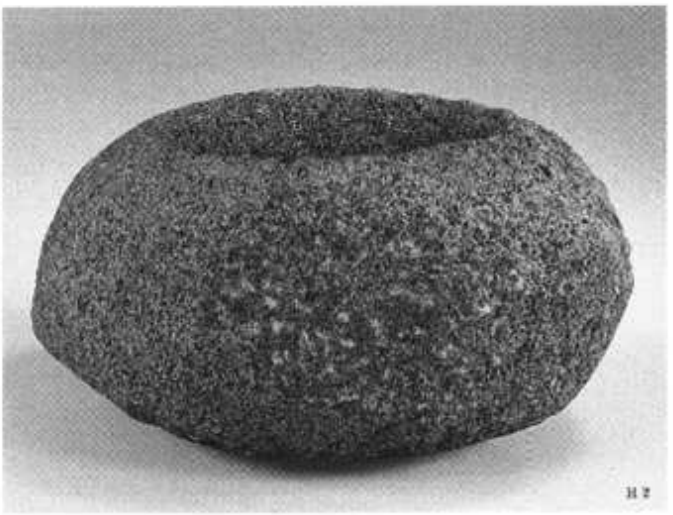
図版八

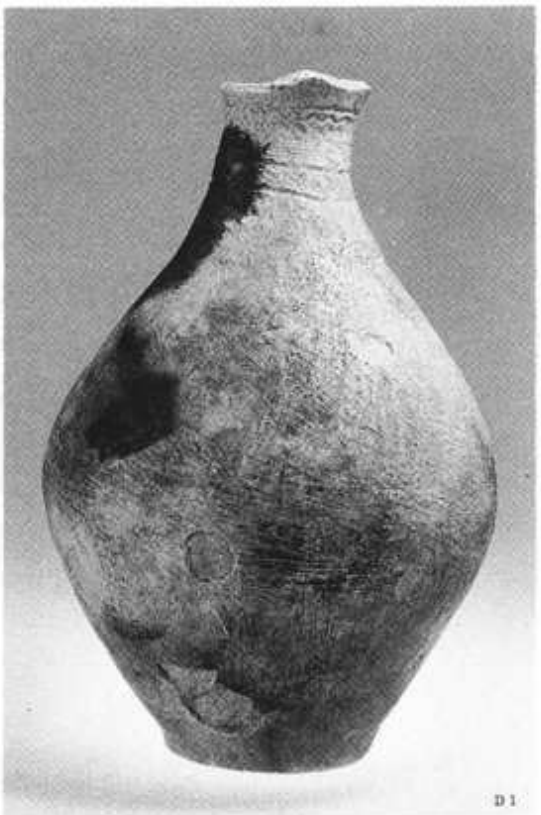
M１号溝状遺構全景（北から）

M１号溝状遺構土層の堆積状況（北から）


H3

H1


H2


D1

M1

M1

M1

H7

H7

H7

H7

H7

H7

H7

H10

H16

H18

H45

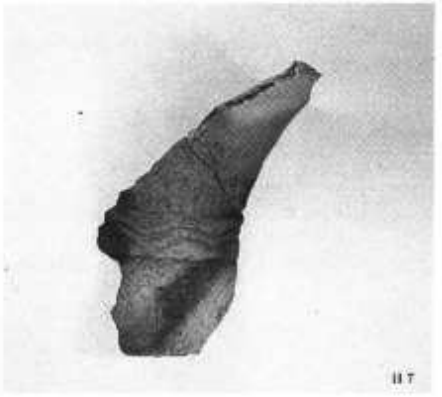
H20

M3

H49

T10トレンチ

H5トレンチ


H7

H7

H4

H10

I 12トレンチ

H25

D 2

I 12トレンチ

H 2

H 2

H 2

H 2

H 2

H 7

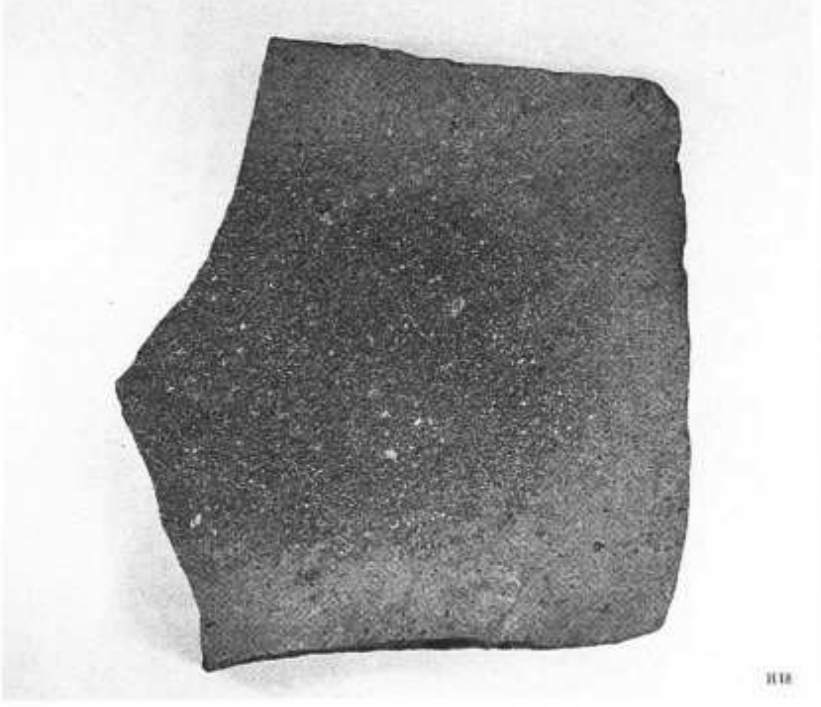
E1トレンチ

H15

H48

H14トレンチ

H25


H18

H 3

H5C:19

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第１集　『金井城跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第２集　『市内遺跡発掘調査報告書1990』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第３集　『石附窯址群Ⅲ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第４集　『大ふけ遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第５集　『立科Ｆ遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第６集　『上曽根遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第７集　『三貫畑遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第８集　『龍の下遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第９集　『国道141号線関係遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第10集　『聖原遺跡Ⅱ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第11集　『赤座知外遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第12集　『若宮遺跡Ⅱ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第13集　『上高山遺跡Ⅱ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第14集　『栗毛坂遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第15集　『野馬久保遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第16集　『石並城跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第17集　『市内遺跡発掘調査報告書1991』（１月～３月）
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第18集　『西曽根遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第19集　『上芝宮遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第20集　『下聖端遺跡Ⅲ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第21集　『金井城跡Ⅲ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第22集　『市内遺跡発掘調査報告書1991』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第23集　『南上中原・南下中原遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第24集　『上聖端遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第25集　『上久保田向Ⅳ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第26集　『藤塚古墳群・藤塚Ⅱ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第27集　『上久保田向Ⅲ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第28集　『曽根新城Ⅴ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第29集　『山法師遺跡Ｂ、筒村遺跡Ｂ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第30集　『市内遺跡発掘調査報告書1992』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第31集　『山法師遺跡Ａ、筒村遺跡Ａ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第32集　『東ノ割遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第33集　『聖原遺跡Ⅶ、下曽根遺跡Ⅰ、前藤部遺跡Ⅰ』

---

佐久市埋蔵文化財調査報告書第34集

西一本柳遺跡Ⅰ調査報告書

1994年３月

編集・発行　佐久市教育委員会
〒384-01　長野県佐久市大字中込3056
埋蔵文化財課
〒385　長野県佐久市人字志賀5953
TEL　0267-68-7321
印　刷　所　㈱佐久印刷所

---